
ArmordCore4 レイヴン・オブ・アナトリア

石田 昌行

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ArmordCore4 レイヴン・オブ・アナトリア

【Nコード】

N1567Z

【作者名】

石田 昌行

【あらすじ】

パックス・エコノミカ。

「国家解体戦争」から始まる「企業」による全体管理。限りある資源の、節度ある再分配。

賢明な経済主体たる「企業」が、資源と市場を独占し、人々はコロニーに押し込まれ、糧食を得るためだけの労働に従事していた。

第一人者の死と盗まれた技術。

彼女が救ったあの男、伝説的なレイヴンと技術研究用のネクスト機体。

唯一の商品であつた専門性を失い、深刻な経済危機にあつたコロニー・アナトリアにとって、生活の糧としての傭兵は必然的な結論だった。

私は、あの男を利用し……そのために彼女を利用した。古い戦士、政治的な利用価値しかない非力なネクスト。この時はまだ、誰もがそう思っていた……私を含めて。

アーマードコアファンサイト「レイヴンズ・ウッド」との重複投稿ですが、近日中にあちらの投稿は削除します。

序章

閃光が走った。

搭乗者の絶叫と共に中隊三番機が橙色の火球と化す。

超高温のプラズマガスが機体主要部を両断し、搭載してあった推進剤に激烈な化学反応を強いたのだ。

四散し周囲に飛び散った機体各部が穏やかだった水面に落ちて、高々とした水柱を築きあげた。

搭乗者の脱出は確認出来なかった。

そもそも陸戦兵器として発展してきたAC^{エイ・シー}には、航空機なみの緊急脱出装置などもとより搭載されてはいない。

機体が誘爆を起こすような損害を被った場合、搭乗者が愛機と運命を共にすることも、やむをえない現実がそこにあった。

おそらくは死亡したに違いない三番機の搭乗者は、国軍の士官^{アナ}学校を優秀な成績で卒業したエリートであった。

選ばれ、磨きあげられ、将来を期待された精鋭だった。

凡人が望んでも得られない資質を有した、類い希なる金の卵だ。戦術戦闘訓練においても、海千山千の強者が揃う教官連中を相手に彼が遅れをとったことなどほとんどなかった。

にもかかわらず、彼は対峙する敵機と自機との間に横たわる圧倒的な性能差を乗り越えることが出来なかった。

それほどの敵であった。

「化け物め」

ACと呼ばれる汎用機動兵器。

その一個中隊を束ねる少佐の口から、高級士官らしからぬ呪詛の言葉がほとばしった。

極めて高い戦意を有する反面、荒くれ者がそろうことでも有名な緊急即応部隊においてですら、士官以上は常に紳士たらんことを要求され教育される。

それは、時に人間性を喪失しかねない悲惨な戦場に身を置いた場合であっても、湧きあがる感情を強い理性で制御し続けるために必要な訓練としての側面を持つ。

窮地に直面した際、容易に激情を炸裂させる指揮官は貴重な部下を無駄死にさせ、組織にとって大きな災いをもたらしかねないからだった。

しかし、今の彼は己の背筋を駆け上がる、ある種の感情を抑え切れる自信を持てずにいた。

その感情の名を「畏怖」と呼ぶ。

彼は、目の前に展開する現状に恐怖心を抱く自分自身を、はっきりと認識していた。

当然だった。

彼らの前に立ちはだかった敵機の数、わずか一機に過ぎない。だが、そのわずか一機の敵に対し一二機ものAC——すなわち中隊全機で立ち向かった挙げ句、戦闘開始一分を待たずして彼は、半数以上の部下たちを失っていたのであるから。

信じられない状況だった。

数で勝る敵に待ち伏せを食らった訳ではないのだ。

むしろ正面切つての遭遇戦に近い。

機動兵器を主力とした戦闘部隊がお互いに真つ向から殴り合い、その結果がこれほど一方的な展開を見せるなど、当たり前前の軍事教育を受けてきた者にとっては青天の霹靂ですらあった。

それはもはや、戦術云々を語る段階以前の問題だった。

続発する非対称戦闘に対抗するため、既存の装甲車両AFVになり代わって台頭してきた人型兵器アーマードコア。

人体と同様二本の脚部によって歩行移動し、先端にマニピュレータを装備した左右の腕部へ多彩な武装を“持たせる”ことでさまざまな任務に対応可能な新世代の機動兵器だ。

全高は一〇m前後。

主に一名の搭乗者パイロットによって運用されるACは、機体各所に備え付けられた高出力推進器スラスターを統合運用し、跳躍を含む立体的な機動を行うことが可能だった。

それは、同様の機動を行えない従来型の戦闘車両を一夜にして旧式兵器へと追いやった。

いささか大袈裟ではあるが、かつて軍事史上において発生した“弩級艦ドレイク級の登場”に近い現象と言い換えてもいいだろう。

出現当初は、戦車MBTに代表される重機甲兵器群に対し戦闘実力面で明らかに劣勢であったACだが、その戦場地形を選ばない戦術的な汎用性が重視され、今では各国が保有する軍事力の中核兵器となっている。

先進国間における大規模戦争、すなわち重機甲兵器を主力とした大兵力同士の激突が遠い過去のものとして数十年。

いかに高度な戦闘力を保有しようとも、投入出来る戦場と部隊運用においてやや柔軟性を欠く重機甲兵器群が、各国の、いわゆる軍事技術者たちに忌避されるようになったのも、まずは仕方のない状況と言えた。

時は流れ、関連技術の著しい発展と現場における運用戦術の進歩によりACの課題であった戦闘実力も格段の向上を果たしていた。少なくとも現役の主力ACを一对一で撃破出来る機甲兵器は、高価な、そしてそれゆえに極めて配備数が限定される数種の駆逐戦車を除いて他にはない。

そして、それらですら練度の高い搭乗者が操る現行のACを完璧に阻止出来るという保証はなかった。

発揮出来る機動力の差が、文字どおり圧倒的であったからだ。人類の歴史において、相対的な機動力に劣る軍事力が火力と装甲の優越を軸にして勝利をつかんだ事例は決して多くない。

逆に、装備に劣る側が優れた機動力を駆使して敵を撃破した前例は数多ある。

純軍事的な面で見ても、戦場におけるACの天下は当分続くも

のと予想されていた。

それは、専門家と呼ばれる知識人たちと実際にACを運用する現場の人間とに共通した認識であった。

そんなACを、あたかも雑草を薙るがごとくなぎはらう強力な機体が存在した事実を人々が知るのは、もう少し先のことであった。それは「次に来る者」^{ネクスト}と呼ばれる^{ネーション}いた。

迷走する「国家」^{ネーション}という存在を見限り、自らが人類の指導者たらんと決起した「企業連合体」^{バックス}——その彼らが密かに開発していた次世代型ACのことだ。

従来型ACをはるかに上回る二〇m近い巨軀を持ちながら、その機動力はまさに圧倒的であり、言うまでもなく火力と防御力は現存する機動兵器の比ではない。

後に「国家解体戦争」と呼ばれるようになる一連の戦乱に「企業連合体」^{バックス}が満を持してこれらネクストを投入した時、それまで国家が保有していた軍事力は瞬時にして無価値な存在へと下がり下がつた。

わずか二六機。

それだけの数しかないネクストによつて、地上に存在する「軍隊」と呼ばれる武装集団は、一様に壊滅的な打撃を被つたのだ。

人員や装備に対する損失は、さほどのものではなかった。

そもそも戦略兵器の大量使用でもなされない限り、万を数える兵力を殲滅することなど、物理的に不可能だ。

だが、ネクストを投入して行われた指揮系統や組織インフラ、つまり情報ネットワークやエネルギー関連施設への神出鬼没な強襲は、結果として「軍隊」という一種の官僚組織からその手足を奪い去ることに成功した。

統一された方策を持たないまま局地的に抵抗を続けた一部組織も、物資と情報の流入を断たれ、ネクストを先鋒とした攻撃を受けることで次々と制圧されていった。

勝敗は最初の一週間で決着していた。

初動の一撃を受けた各国の政府は完全に虚を突かれた形となり、「企業連合体」はわずか一ヶ月を要しただけで人類の上に新しい秩序を構築した。

国家組織の無条件降伏と言ってもいい。

それまで想像もしていなかった身内からの武装蜂起という事態に対して、従来の統治機構はまったくの無能であったことをさらけ出した。

彼らは、自らが置かれた状況がどのようなものなのか、そもそも敵対してきた存在が何者なのかを知ること出来ずに、表舞台から力づくで退場させられたのだった。

ただし、局地的な戦場でいかに強力ではあっても絶対的な数において限界があった「企業連合体」の軍事力は、各地に旧国家の残党が独自の勢力を維持することを阻止しえなかった。

いかなる達人が振るう名刀の一閃であっても足下にうごめく複数の蟻をことごとく一刀両断に出来ないことと、それは同様の結末だった。

バックス・エコノミカ
「経済による平和」

そう評されたこの時代ではあるが、現実には人類が初めて経験する「新秩序」に対し、それを受け入れられない「旧秩序」が実力をもって抵抗し続けている争乱の時代だと言い換えてもいい。

それは過去の人類史、そのほとんどを占める期間と何ひとつ違わない、おびただしい流血をとまなう、「時代」そのものの姿であった。

人間が過去の歴史を情報として後世に伝えるようになって数千年が経過する。

にもかかわらずその行動様式が一向に変化していないのであれば、人類という種は想像以上に愚かしい存在であるのだろう。

だが統治者である「企業連合体」^{バックス}は、ある意味で今の状況を好意的に受け止めていた。

世界中で局地的な紛争が頻発し、支配者^{バックス}が手に負える範囲での

破壊とそれに付随する復興とが交互に訪れる世界こそ、新たな経済活動の土壌を渴望する「企業連合体」各社にとって、極めて望ましい世界であつたからだつた。

そこにあるのは残酷なまでに冷徹な市場の論理そのものであり、人道や社会正義の存在など薬にしたいくても欠片すら見付けることは叶わなかつた。

人々は、そんな彼らが得た利益の分け前をあえて甘受することによつて心身の安定を図り、公の秩序をかううじて維持することに成功していた。

適切な利益配分の行使による人民の統治。

衣食足りて礼節を知る。

それは決して悪い采配ではない。

ゆえにこそ、「平和」と「戦乱」との間にある距離は一般的な市民感覚ほどに離れていないのかもしれない。

AC特殊部隊「エクスカリバー」の指揮官であるヴァルター・ノボトニー少佐は、目の前に展開される現実に戦慄せざるをえなかつた。

それは実戦豊富な彼ですら、いまだ体験したことのない非常識なまでの戦況だつた。

悲惨な負け戦だから、という訳ではない。

そんなもの、彼は過去にいくらでも経験している。

任官したばかりの少尉時代、ヴァルターは、圧倒的な数を有する反体制ゲリラ部隊に指揮下の小隊ごと包囲され、孤立無援の戦いを演じたことがある。

周囲から浴びせ掛けられる自動小銃の火線を潜りつつ次第に数を減じていく部下を指揮し、自身も数発の銃弾をその身に受けながら、味方の救援が到着するまでの時間を彼は全周防御で耐久した。初陣であつた。

だがそういつた危機的状況ですら、一步引いた第三者的な視点

で顧みてみれば軍事的常識には合致している戦況であると断言出来た。

劣勢となった原因はそのほとんどが人的な要因、すなわち指導部の状況判断ミスによるものであり、それゆえにきちんと合理的な説明の付くものであった。

今彼と彼の中隊が直面している状況とは根本的に種類が異なっている。

最新の軍事的教育を受けてきたヴァルターにとって、これはまさに悪い夢だとは思えなかった。

ヴァルターは、祖国《環太平洋連邦》の士官学校を卒業後、ユーラシア大陸東部で発生した多民族国家の内乱へ治安維持部隊の一員として派遣されたことを皮切りに、若くして幾多の実戦を経験した。

最前線に展開するAC中隊に転属を命じられたのはそれから数年後であった。

彼はその地で赫奕たる戦果をあげ、優秀なAC操縦者^{レイウン}、かつ全軍でも指折りな戦闘指揮官^{スコドリダー}としての評価を確固たるものとした。

配属当初はこの若すぎる中隊長に批判的な目を向け、「若造」「士官学校あがりのボンボン」呼ばわりしていた古株どもも数回に渡って彼の指揮を受けた結果、「中隊長殿」と敬意を込めた眼差しを向けるほどになっていた。

もはや内戦とすら言ってもいい激烈な混乱がかるうじて収束に向かった後、漸く本国へ帰還したヴァルターは教導部隊^{アグレッサー}へ配属となり、今度は教官として多くの後身たちを鍛えあげることに成功した。

そして「国家解体戦争」勃発後、希望して前線へと復帰した彼は、そこでもまたさまざまな任務を成功へと導いてきた。

大陸で指揮していた歴戦の部下たちをなんとか手元に呼び寄せたヴァルターは、彼らを統率し、主として欧州の地を縦横無人に駆け回った。

情報も物資も兵力すらも不足し、そもそも戦略目標そのものが見当たらないという手探りの状況下、彼らは、悪名高い騎兵指揮官ジョン・S・モズビーのとき戦いを演じ、圧倒的な敵をきりきり舞いさせた。

過去を賞賛し、現状に満足し、将来に期待すべき人物。

オフィサー

彼は、まさしく「軍隊」という組織が求める理想的な士官であった。

そして“勇将に弱卒なし”を証明するかのごとく、彼の率いる男たちもまた、背負わされた期待に確実な実績をもって応えた。

彼の指揮するAC中隊は、いつしか特殊部隊「エクスカリバー」と称され、常に激戦地へと投入され続けた。

その中には、“生還不能”と評されるほどに過酷な状況すら幾度となくあった。

だが、彼と彼の中隊はそれら死線を毅然として踏み越え、銃後に誇るべき戦果をともなつて舞い戻ってきた。

補給・整備すらままならない絶望的な戦場。

ヒット・エンド・ラン

「エクスカリバー」は徹底的な一撃離脱を駆使することにより、「企業連合体」の軍を文字どおり翻弄した。

臆病と大胆の理想的な融合。

彼らは後に、敵側の指揮官からそのようなように評価された。

立て続けに成功させた困難な作戦任務。

成功確率が低かったのもさることながら、その作戦でひとりの部下も失わなかったことで、ヴァルターは大きな自信を獲得した。

自分も、そして自分の部下たちも、厳しい訓練と豊富な実戦経験によって鍛え上げられた一騎当千の精兵であると心の底から自負出来た。

スバルタニアン

それはある種の“信仰”であると言ってもいい。

過去の実績が信仰を裏付けることはあっても、それを裏切るようなことは一度としてなかった。

だから、企業本社施設に対する直接攻撃という極めて投機的な、

言い換えれば無謀と言っていい作戦に参加を命じられた時にも、ヴァルターは特別な悲壮感を抱かなかった。

それは、彼の薰陶を受け、共に地獄の最前線を潜ってきた部下たちにしても同様だった。

根拠のない全能感がこの時の彼らを支配していた。

想えばそれは、危険の兆候であつたのかもしれない。

企業本社施設に対する襲撃は「エクスカリバー」のみをもって行われた。

兵力に余裕がなかったことも一因であるが、それよりも大部隊を集結させることで奇襲効果が失われるのを司令部が恐れたゆえの決断だといえよう。

施設全体の破壊や占領などは最初から考慮に入れられはしなかった。

そんなことは不可能だったからだ。

仮に成功したとしても、わずか一個中隊という寡兵では本腰を入れた敵の反撃に耐久出来るとは到底思えなかった上、戦略的な利点も見出せなかった。

「この作戦は間接アプローチによって組み立てられている」と、作戦立案に関わった参謀士官はブリーフィングにおいてヴァルターたちに揚々と語った。

我々が企業の本営を襲う力を有しているのだと彼らに知らしめることで、限定的にしろ防衛的な態度を強いることが出来る。

それは彼らの持つ軍事的な主導権を一時的に弱め、引いては我々の選択肢を増やすことへと繋がるのだ、と。

「どのみち俺たちに選択肢なんざありはしないんだろ？」

隊員のひとりが皮肉混じりにそう言った。

「俺たち下っ端には偉いさんの都合なんかどうでもいい訳で。

そんなものより、もっと多くの弾と機体を寄越して下さいよ」

隊員たちが一斉に笑い声をあげた。

隊長であるヴァルターも例外ではない。

本音であつたからだ。

おそらくは前線に出ることなく机上の計画にいそしむ経歴を積んできたのであろう参謀士官の顔色が、さつと音を立てて青冷めた。ヴァルターは、部下たちがこの期におよんでなお高い士気を維持していることに満足感を覚えた。

作戦開始にあたり「エクスカリバー」全機に対し、十分以上の弾薬と燃料とが用意されたのが本件を理由としたためなのかどうかはわからない。

豊かな自然に囲まれた巨大な人工湖の中心にそびえ立つ、奇妙な見てくれを持つ建物。

予想外に手薄だった警備部隊を難なく突破して作戦目標である“それ”——すなわち企業本社施設に迫った彼らを迎えたのは、単機のACによる迎撃だった。

見たこともない機体であつた。

「エクスカリバー」が使用している従来型のACと比較してふた回り以上も大きい、そのシルエットは細身で女性的、いやむしろ蠅螂のごとき昆虫類を連想させる。

悪魔的禍々しさをまとうていると評してもいい。

これと比べると「エクスカリバー」が使用しているACなど、出来の悪い木人形のようにさえ思えてくるほどだ。

噂に聞く新型か。

咄嗟にヴァルターは警戒し、その心情を部下たちに伝える。

油断するな。気を張っていけ。

「企業連合体」が戦場に投入した新型ACについて、ヴァルターたちは漠然とした情報しか握っていない。

いわく、航空機のごとく自由に空を舞い、こちら側の攻撃を一切受け付けず、わずか一〇数秒でAC部隊をたやすく蹂躪する。

言葉にするのは簡単だが、現行の技術でそんな機体を作れるなどとヴァルターには到底思えなかった。

“想像を絶する新兵器”などというものは、およそ空想世界の中にしか存在していない。

人類の歴史上、一方が戦場に投入しえた新兵器はもう一方においても開発中であるか、少なくとも理論的には実現可能な代物であり続けてきたのだ。

軍事面に限らず技術革新とは常に地道な研究の積み重ねに起因するものであり、突如として舞い降りる天啓によってもたらされるものではない。

少なくとも、これまではそうだった。

ゆえに、この「新型AC」に対する伝説も、よくある戦場神話のひとつに過ぎないとヴァルターは断じた。

幽霊の正体見たり、という奴だ。

現実世界にその姿を引きずり出してみれば、伝説も当たり前常識と工夫の融合体に違いない。

加えて彼我の戦力比率は一二対一。

ランチエスターの法則を持ち出すまでもなく、数の上では圧倒的に優勢である。

この新型機がどれほどの高性能を発揮しようとも十分に対抗出来る。

物理的にそれが約束されているはずだ。

ヴァルターだけでなく中隊の誰もが、もはや作戦の成功は疑いないものと確信した。

それも無理のない状況だった。

そのわずか一機の迎撃戦力が、彼らがありえないと切り捨てた“想像を絶する新兵器”であることを思い知る、その瞬間までは。

最初の一撃で先行していた二機のACが敵機に食われた。

それは、ヴァルターが最も信頼をおき、数年間同じ釜の飯を食った古強者の中尉とその列機だった。

彼らは艦載速射砲と同等の口径を持つ化け物じみた機関砲弾に

よって、搭乗していた機体ごとその肉体を粉碎された。

敵機は「エクスカリバー」が想定した有効射程距離外から一気に踏み込み、その左腕部に携帯した火器を発砲したのであった。

信じられない加速性能であった。

従来型のACでは、それが最新型であつても発揮出来る最高速度は時速一六〇kmが精々だ。

それも条件がいい場合に限られた。

それを越えればACは操縦者の意図を離れ転倒する。

現行の機体操縦システムでは、主に反応速度の面でそれが限界だとされていた。

だが目の前の新型機は、それに数倍する最高速度を計測した。それも、まるで電磁式カタパルトを使用したかのごとき短時間で、だ。

ありえなかった。

常識離れた超加速を実現する大出力推進器の存在も、その状況下でなおも搭乗者が機体姿勢を制御しえる操縦システムの存在も、新型機が発揮した速度は、単なる正面攻撃を完璧な奇襲へとすり変えた。

隊員の対応速度を状況の変化速度が上回ったからだだった。

中隊が事態を把握するまでの短時間で、さらに一機が撃破された。

「国家解体戦争」がなければ気立てのよい婚約者と結婚式を迎えていたはずの若い少尉であった。

彼の乗機は突進してきた敵機が振るう超高温のプラズマガス・レーザーブレードの一閃によって文字どおり上下に腰断され、少尉の存在はその過程で蒸発して果てていた。

「一体、何が起きているんだ……」

思わずヴァルターは息を飲んだ。

戦闘部隊の指揮官として許されざることだが、思考が現実の認識を拒んでいる。

これまで噂だけは耳にしていた「次世代AC」
ネクスト

「企業連合体」による軍事行動開始と共に先兵として戦場へと投入され、国家政府の軍事拠点を次々と粉碎しているという企業側の秘密兵器。

確かに圧倒的な戦闘実力だと聞いてはいたが、まさかこれほどとは思わなかった。

尋常の火力と機動力ではない。

というより、同じ技術レベルを持つ勢力が開発可能な性能だとは思えない。

“想像を絶する新兵器”

本当にそんなものが実在しえたのか？

馬鹿な。ありえない。

混乱が心中を支配する。

だが、瞬時にヴァルターは、そのもやを振り払った。

戦争だ。これは戦争なんだ。

どんなことでも起こりえる。

目の前で起きている現実だけを認識しろ。

湧き起こる不安を、彼は強引に打ち消した。

己自身を激しく叱咤する。

やれるはずだ、同じ人間なら。

自分と部下たちの実力を信じる。

が、眼前の敵が見せた圧倒的な戦闘力に驚愕したヴァルターだった。彼はわずかな時間で混乱から立ち直ると中隊全機に散開を命じた。

中隊の残存機は、混乱する兆しも見せずに両翼へ扇形に広がる。一機しかいない敵機を左右から包囲し、集中砲火を浴びせる構えだ。

高い練度の保有者らしく、機敏かつ迷いのない動きであった。もちろん彼らとて初めて遭遇する新型機の実力を目の当たりにして、半ば恐怖に似た心情を抱えていたことは確かだ。

この時点でなお彼らの戦意が旺盛であつたと評せば、それは明らかな嘘になろう。

だが常に中隊を率先してきた指揮官^{ヴァルター}への信頼と自らの実績に対しての自負とが、すくみかかった彼らの両脚を突き動かした。

敵機が性能面でこちらをはるかに凌駕していたとしても、それがA C同士であるならば必ず戦いようはあるはずだ。

そして、戦えるのでさえあればそこに勝機は存在する。

少なくとも皆無ではない。

皆無であるう訳がない。

だが常軌を逸した勢いで中隊の陣形内へと躍り込んできた新型機は、彼らとすれ違いざまに二機を、そして離脱反転してすぐに一機を撃墜した。

墜とされたのは任官したばかりの頃からヴァルターが目を掛け、漸く一人前の士官として小隊を任せられるようになった中尉と、その部下たちであつた。

それは完全なる正面攻撃であつた。

小細工など一切ない。

中隊の各機は相互支援可能な戦術隊形を崩すことなく、教科書どおりに敵機の来襲を真っ向から受け止めた。

戦術的な過誤は、どこにも見られなかった。

だがしかし、彼らには耐久の暇など寸分も与えられはしなかった。

新型機^{ネクスト}の攻撃を受けた「エクスカリバー」は、反撃する余地もなく、ほとんど一撃で半壊状態へと陥っていた。

絶望的な火力の洗礼であつた。

軍の主力機動兵器であり相応の対弾防御を施してあるはずのA Cが、ひと溜まりもなく沈黙させられていく。

ネクストとは、ネクストとはこれほどまでに強力な存在なのか！
駄目だ。

ヴァルターは目を見張った。

性能が違いすぎる。

眼前の敵機は、今彼らが搭乗している現行型のACで太刀打ち出来る代物ではない。

骨董品のような対戦車ライフルを携えて、最新鋭の主力戦車《MBT》に単身戦いを挑むようなものだ。

「ブレイド〇一ゼロワンより中隊全機。各自、戦場を離脱しろ。逃げるんだ、急げ！」

このままでは全滅する——そう判断したヴァルターは、残存する機体に向けて退却を指示した。

“逃げる”という、およそ軍人が用いるべきではない直接的な単語を使用すらした。

彼は言葉を飾り体面をつくろうと惜しんだのだ。

そして、自らは部下の脱出を援護するために荒れ狂う竜巻のときネクストへ向けて猛然と突撃を開始する。

一機でもいい。生き延びてくれ。

己が生還する望みは即座に捨て去った。

それが指揮官たる者の責務であると、軍人としての矜持が彼自身の決意を支えていた。

ヴァルター機の大口径機関砲三十五mmが咆哮し、今まさに近接戦闘で彼の部下を屠ったばかりのネクストを背後から襲う。

直撃は必至だった。

少なくとも手傷は負わせられる。

ヴァルターは確信し、なおも引き金を絞り続けた。

さらなる曳光弾が敵機へと伸びる。

しかし、ネクストの周囲を覆う目に見えない“何か”が障壁バリアのごとくそれを阻んだ。

至近距離では主力戦車の複合装甲すら貫く大口径機関砲弾は、稲妻のような発光だけを残して虚空に消える。

ネクスト本体に着弾の形跡は見当たらなかった。

馬鹿な、何が起こった！

信じられない現象を目の当たりにして、ヴァルターは絶句した。だが、ネクストは自機の防御力を確信していたのである。それは、ヴァルターのACが放つ攻撃をあたかも子供の投げる紙礫であるかのごとく無視し、悠然と振り返り発砲した。

一発、二発――

図太く禍々しい曳光弾がヴァルターの乗機めがけて吹き付けられる。

機体を小刻みに揺すり三発目までは敵の攻撃を回避したヴァルターだったが、四発目以降を避け切れなかった。

易々と装甲を撃ち抜かれた右腕部と頭部とが瞬時に爆砕され、その衝撃で横転したヴァルターの乗機は大地へと勢いよく叩き付けられた。

轟音と共に激しい衝撃がヴァルターを襲い、飛び散った金属片がひしやげた操縦席内部を跳ね回って一部が彼の肉体を貫いた。

獣じみた声が喉の奥からほとばしる。

凄まじい痛みが腹部に走り、込み上げてきた生暖かい塊が音を立てて口から吹き出した。

鉄の味がする。

血液だった。

内蔵をやられたな、とヴァルターは自己判断したが、それは今の彼にとってどうでもいい現実であった。

出血のためか急激に薄れゆく意識の中で、ヴァルターは残った部下たちがどうか逃げ切れるように、と祈った。

それだけが、今の彼に唯一実行可能な彼らへの支援であったからだ。

捲土重来など考えずともいい。

自分の未来を掴み取ることだけ考える。

無駄死にだけは、無駄死にだけはするな。

だが、直後に飛び込んできた通信がヴァルターの耳朵を激しく打った。

『少佐殿を救え！ 各機突撃』

駆け出しの頃から列機として可愛がってきた副官の声であった。童顔で生真面目な男だった。

その正義感の強い性格は、凄惨な戦場において不釣り合いなほど彼に人道とやらを語らせることが多かった。

仲間を、上官を見捨てて逃げ延びること。

副官は、それを唾棄すべき行為と判断し、ヴァルターの命令よりも己の正義心を上位に置いたのだ。

馬鹿野郎が。

ヴァルターは、齒軋りしてつぶやいた。

そして、部下たちの死を半ば確信のごとく予感しながら、彼の意識は光のない深淵へ、ゆっくりと沈んでいった。

傭兵（1）（前書き）

この章には一部R15指定に相当するシーンがあります。注意してお読みください。

傭兵（１）

脇腹に残る古傷がうずく。

悪夢によつて目覚めるのは、これで何度目のことだろう。

それも決まつて“あの時”の夢で、だ。

冷たい寝汗でぐつしよりの上体を寢床から起こし、ヴァルター・ノボトニーは静かに煙草を燻らせた。

やや癖のある黒い頭髪を持った彼は、今年で齡三六。

到底二枚目には見えないが、その猛禽のごとき鋭い双眸と過酷な実戦経験を深く刻み込んだようないかつい面持ちには、ぬるま湯につかつた生活を送る若者たちには決して持つことのかなわない一種野武士のごとき風格を漂わせている。

軍歴を離れて早四年。

しかし、日々怠ることなく続けてきた自己鍛錬により、その露わとなつた上半身に無駄な脂身などひとかけらも見当たらなかった。ただし、それは純粋な競技者が持つ肉体にも見えはしない。

身体の各所に消えることなく存在を誇示し続ける無数の傷跡が、彼の肉体を戦士のそれだと主張してやまなかつたからだ。

紫煙が揺れ、煙草の火が赤く灯る。

外はまだ暗い。

何気なく壁面に掛けてある時計へと目をやる。

ほぼ深夜と言つていい時間帯だつた。

そのせいか、半開きの窓から吹き込んでくる涼しい微風が汗だくの素肌心地よく感じられた。

「どうしたの。またあの夢？」

ヴァルターと同衾していた女性が釣られて目覚めたのか、心配そうに声を掛けてきた。

蜂蜜色の頭髪をさっぱりと短めにそろえた、清しい印象を見る者に与える女性である。

明らかに若い。

まだ少女の面影を色濃く残している風情だ。

少なくとも、三〇代も半ばをすぎたヴァルターとはひと回り以上離れた年齢に映る。

ヴァルターと同様、彼女もまた薄いシーツに覆われたその滑らかな肢体には衣類らしきものをまとってはいない。

おそらくはそのままの姿で共に寝床へ着いたのであろう。

ふたりがいわゆる“男女の関係”にあることは明白であった。

そしてそれが、今のふたりの間に横たわる距離をあからさまに表していた。

月明かりが差し込むだけの寝室で、彼女の持つ艶やかな素肌がアラベスク大理石のように輝いて見える。

瑞々しく張りのある白い肌。

歴戦の跡を無数に残す、日に焼けたヴァルターのそれとは明らかに異なる。

それは、彼女の人生がまさにこれから盛夏を迎えるのだと、百万の言葉よりも雄弁に語りかけているようだった。

彼女の姿態を目にする度、ヴァルターは、かすかな罪悪感に捕らわれる。

それはまるで大切に育てられた温室の花を自ら手折ってしまった時に感じる、複雑な心境に近い思いであった。

本来なれば彼女は自分のような薄汚れた敗残の兵とこんな関係に陥るべき女性ではないはずだ、という確信が、心中のどこかに深く根を張っている。

引け目や負い目というのとは少し違う。

上手く言い表せない。

それがなんとももどかしく、そんな時ヴァルターは、無理矢理に笑顔を形成することで自分を押さえ込むよう心掛けていた。

「大丈夫だ、フィオナ」

軽く口の端を綻ばせ、ヴァルターは言った。

左手をゆつくりと伸ばし、自らが“フィオナ”と呼んだ女性の黄金色に輝く前髪を優しく指先で弄ぶ。

「少し気分がたかぶっただけだ。一服すればもとに戻る」

「そう……」

フィオナと呼ばれたその娘はシーツを、その豊かな胸元を隠すように引き上げながら、けだるそうに半身を起こした。

耳元の髪を左手で掻き上げつつ、ヴァルターの眼を上目づかに覗き込む。

「それならいいけど」

「心配性だな」

ヴァルターは、ぎこちなく破顔した。

「戦争はもう終わったんだ。悪い記憶は風に流されて、そのうちに消えてなくなるさ」

「企業連合体^{バックス}」が「国家解体戦争」の終結を宣言してから四年が経過していた。

当初は新しい秩序の担い手である「企業連合体」に反発していた武装勢力も、ネクストの存在という圧倒的な実力差を見せつけられた結果、その多くが今では派手な行動を控えるようになっていた。市井の人々は「コロニー」と呼ばれる群居地に押し込められ、少なくとも衣食住には不足しない穏やかな日常を保证されていた。

もちろんそれが企業による独占的な管理社会である以上、一般の民衆が統治に参加することは認められていない。

努力によつてそのような地位へ登ることもまたしかり、であった。

企業がコロニーの人々に求めたのは経済活動に従事する労働力の提供であり、市場を構成する消費者としての存在であつた訳だから、それは当然のこととも言える。

コロニーに住む人々は、企業にとつて、ある種の「奴隷^{スレイフ}」、いや「家畜^{キャトル}」と言い換えていいのかもしれない。

そういう意味では、「バックス・エコノミカ経済による平和」とは独裁官僚制に近い政治形態なのだろう。

この世界には、大まかに分けて二種類の人間しか存在を許されていない。

「統治する者」と「統治される者」の二種類だ。

両者の間に存在する間隙は絶対的なまでに大きく、いずれは世襲化され自己永続的寡頭政治へと変化していくに違いない。

それは端から見る限り、絶対王政時における欧州社会と何ほども違う制度に映るはずだ。

違うのは、そこに「王」や「皇帝」がないことぐらいである。ただし統治者である「企業連合体」が人々に保証した生活は、地上に住む大半の者たち——先進地域に居住していた一部の者たちを除くほとんどの人間を最低限満足させうる水準にあった。

皮肉な話だが、「経済による平和」は全世界規模におよぶ富の再分配、すなわち南北問題の解決を成し遂げることで民衆の支持を集めたのである。

彼ら「企業」は、すべての罪を当時の統治者である「国家」、それも一部先進国へ押し付けることにより「ホワイト・ナイト白馬の騎士」としての立ち位置を手に入れた。

弱者を救う力の行使は明白な正義。

いかにも単純だが、それゆえ誰の耳にも心地いい、

その旗印は今もなお、「企業連合体」が暴力をもって統治者の椅子を強奪した理由の正当化に用いられている。

これほどのマキャベリズム的手法を難なくやってのける敵と相対したのだ。

例えネクストの存在がなくとも、「国家」がその統治権を「企業」によつて奪われるのは時間の問題であつたと言えるだろう。

余りにも戦う相手が悪すぎた。

四年前。

ヴァルターが信頼すべき部下たちを永遠に失ったまさにその日、奇しくも彼の祖国は「企業連合体」に対して膝を屈することを選択していた。

実力による抵抗を諦めたからではない。

それは水面下で進められてきた秘密交渉の結果として、であった。

つまりヴァルターの祖国、いやその指導者層と「企業連合体」の上層部とがお互いに矛を収める条件の合意に成功したという訳だ。報道機関によって大々的に知らしめられた、その“英断”の影で、しかしヴァルターたちの作戦行動が語られることはなかった。

一文字も、である。

それは、彼の^{エクスカリバー}中隊に命じられた作戦が端から軍事的な成功を求められて計画されたものではなかったことを明確に物語っていた。

詰まるところ、あの襲撃作戦は多分に政治的色彩を有したものである——要するに国家勢力による「企業連合体」への政治的脅し、既得^{デモンストレーション}権益に対する配慮を引き出すための意思表示に過ぎなかったということだ。

我々にも甘い汁を吸わせろ——さもなくば、無謀な抵抗をも辞さない。

それは、もはや純粋な軍事活動と言うよりもテロリズムの方に近い思想と言えた。

よく誤解の対象となるが、本来のテロリズムとは実力の行使によって政治目標の達成を目指すようなものではない。

それは基本的に、一方の実力行使を避けるため、もう一方が下す政治的妥協の引き出しを目的とした示威行動なのである。

確かにこの計画を立案した者たちは、極めつけに優秀なスタッフだった。

まさしく国家エリート中のエリートだったと評してもいいくらいだ。

彼らは、“たった”一個中隊を生け贄に差し出すことで、自分

たちの政治的・経済的な立場を「企業連合体」に保証させたのであるから。

だがそれは、およそ“公人”のなすべき決断でありはしなかった。

彼らは自らの保身のため、すなわち己の私欲、ただそれだけのために一二人の人間を、その未来を犠牲にするのを厭わなかったのだ。

なんという無責任。

なんという傲慢。

なんという……

彼らは、自らを神に選ばれた不可侵の存在だとも考えていたのだろうか。

腐敗の極みに達していたとはいえ、素朴な忠誠心の対象であった祖国の隠された本心を知り、ヴァルターの中で何かが折れた。

ヴァルターとその部下たちは職業軍人として、すなわち彼らがその身を置く“公”の剣及び盾として、文字どおり身命を賭してきた。

少なくとも、そのように誓約し、心からそれを信じ、そして誇りとしてきた。

もちろん、それが絶対の正義であるなどと、彼らは思ってもみなかった。

人は神でないがゆえに、時には愚かしい過ちも犯すとわかっていた。

彼らを支えていたものは、いわゆる“矜持”であった。

“私”を捨て去り、“公”に生きる防人としての自認。

名も知らぬ多くの人々、その権利と尊厳とを守っているのが自分たちだという確固たる自尊心^{プライド}。

それなくして、一体どこの誰が殺人稼業などをひさげようものか。

それが公然と裏切られた。

「国家上層部」という、本来なれば私を捨ててまで公につくすことを求められる人々の既得権益を守るため、自分と愛すべき部下たちは死地に送り込まれたのだ。

まるで道化師^{ヒエロ}だった。

砕け散った矜持を前に、もはや笑うことしかヴァルターには出来なかった。

見知らぬ寢床で目覚め、時間の感覚もなく呆然と白い天井を見詰めている間、彼は自らが生きている意味をすら失いかけていた。

絶望と自己嫌悪とが、その時のヴァルターを漫然と支配していた。

そんな彼を暗闇の縁から救ったのは、傍らで献身的な介護を続けてくれた、ひとりの純朴な少女であった。

彼女の名は、フィオナ・イエルネフェルト。

^{ネクスト}次世代AC制御技術の提唱者、マルクス・イエルネフェルト教授のひとり娘である。

当時まだ学生の身分であった彼女は、技術交流のために某企業本社を父親とともに訪れたその日、反企業連合勢力^{ヴァルターたち}による武装襲撃に遭遇したのだった。

モニター越しに映る“現実の戦闘”

待ち受けていた企業のネクストによって次々と撃破され、搭乗者の生命を飲み込んだまま爆散する襲撃者たちのACを目の当たりにして、彼女は強い不快感を覚えた。

そして、すべてが終わりを迎えた後、気分転換とばかりに外出が禁止されていた施設外の区域へと足を踏み出した夕暮れ時、フィオナは「彼」と出会ったのだった。

おそらく、襲撃者たちの生き残りであるのだろうひとりの男性。瀕死の重傷を負いつつも、最後の力を振り絞るようにして撃破された乗機から脱出を果たしたに違いない彼は、意識もなく、まるで打ち上げられた流木のように企業本社施設を囲む湖水の波打ち際に横たわっていた。

フィオナがなぜ彼を匿ったのかは、本人にもわからない理由からであった。

夕闇に乗じて自身よりもひと回り以上大柄な彼の身体を引きずるように自室へと運び込んだ彼女は、父親以外の誰にもそのことを告げずにその男性を救おうとした。

彼が意識を取り戻したのは、それから数日を経てからであった。彼が負った腹部の傷は思いの外深く、一部は内臓にまで達していたほどであったが、イエルネフェルト教授が秘密裏に手配した医療スタッフによる適切な治療が功を奏し、命に別状があるまでには到らなかった。

「おめでとう。あなたは生きているのよ」

自分の置かれた状況を掴めずゆっくりと首を左右に振る彼の手を優しく握り、フィオナはそう語りかけた。

そして、「お名前を教えて下さる？」という彼女の問い掛けにその男性は、「ヴァルター……ヴァルター・ノボトニー」と、つぶやくように答えた。

白濁した意識が判然としていくにつれ、ヴァルターは、部隊の中で生き残ったのが自分だけなのだと認識した。

自分を信じて戦地に果てた部下たちを尻目に己だけが生をまつようとしているという現実を知り、彼は不覚にも落涙した。

なぜ生き長らえてしまったのだ。

痛切な自責の念に駆られ自らの存在を否定しようとするアラタールを、彼よりもはるかに年少であるフィオナが激しく叱った。平手打ちが、彼の頬を強く叩く。

ぱしっという音が空虚な室内に鋭く響いた。

そして、同席した父親が啞然とする横で彼女はキツパリと宣言した。

「どうしても捨てるというのなら、あなたのその命、わたしが頂きます。異論はありませんね？」

腰に手を当て、いたずら坊主を前にした母親のごとき態度で彼

女はヴァルターに畳み掛ける。

「あなたの命を救ったのもわたしなのですから、これは当然の権利です。それを踏まえた上で、わたしはあなたに命じます」

わたしの許しを得ることなく、勝手に死んではいけません。

鼻息荒くフィオナは言った。

それは、いささか滑稽なやり取りではあった。

いや、明らかに喜劇がかつてしていると断言してもいい。

しかし、この時の彼女が放った真摯な光に気圧されたヴァルターは、無意識のうちに直立不動の姿勢を取り、敬礼し、あたかも尊敬すべき上官に対するかのように「了解^{コペ}」と応えたのだった。

以降、彼はイエルネフェルト家の食客として、小アジア半島の根本に位置するコロニー、「アナトリア」での日々を過ごしている。

それは、退屈ではあるが同時に極めて充実した日常であった。

肉体に負った傷だけでなく、祖国に捨て駒とされたことで受けた心の傷も、日を追うごとにゆっくりと癒えていくようであった。

元来天涯孤独の身であったヴァルターにとって、今やアナトリアはなくてはならない大切な故郷となっていた。

イエルネフェルト教授の推薦により、軍事の専門家を欲していたアナトリア防衛部隊に教官として迎え入れられた彼は、そこで新しい人間関係を構築し、己がアナトリア社会の一員となれたことを実感した。

ようやくのことで獲得した自分自身の生活基盤。

彼は「アナトリア人」として初めて手にした給金をもって、イエルネフェルト家の主とその娘とを食事に招待した。

返そうにも返しきれはしないだろう莫大な量の“恩義”

だからといって何も行動に移さないという選択肢は、ヴァルターの中に存在しなかった。

どれぐらいぶりに心から笑ったであろう。

人生を楽しむこと。

それ自体を忌避していた自分自身を発見し、ヴァルターは深く

恥じ入った。

それは、自分を支え立ち直らせようとしてくれていた人々の思いを無碍にする行為そのものだと言ったからだ。

教授が急な私用で席を立ったのは、まだ宵の口のことであつた。この時、大切なひとり娘を預けられたヴァルターは、彼から向けられた信頼の重さを痛いほどに感じた。

どこの馬の骨か知れぬ自分に対し、手中の玉とも言える存在を託してくれる。

その思いを無視する訳にはいかない、と彼は自分自身に言い聞かせた。

残されたフィオナは、父親が彼女に提供してみせた気配りの一部に便乗してか、普段以上の朗らかさでヴァルターと接した。

魅力的な女性だと、改めてヴァルターは思った。

それは、時にすれ違う男性を振り向かせる彼女の美貌がもたらした感想ではない。

ヴァルターの目にフィオナが眩しく映るのは、彼女が前だけをしっかりと見詰めているからだ。

光り輝く希望に満ちた望むべき未来を。

いかに努力しようとも、過去と、その過去の積み重ねに過ぎない現在とを直視することしか出来ない自分とは、まるで生きる世界が異なっている。

それは、羨望に近い感情だ。

渴望に近いと言ひ換えても過言ではない。

それを自覚した時から、ヴァルター・ノボトニーにとって、フィオナ・イエルネフェルトは明確に守護すべき対象となつた。

多彩な欠点を有しているであろう彼だけの女神に仕える、たったひとりの聖職者^{クレリック}。

彼はそんな自分の立場に満足し、それ以上の伸展を望みはしなかった。

その彼を“流神”の道へと誘つたのは、皮肉なことに彼の仕え

る女神、フィオナ・イエルネフェルトその人であった。

大量に経口摂取したアルコールの力を借りて、彼女は自分の想いを必死になってヴァルターに伝えた。

「わたしをあなたの彼女にして下さい。そして、どこにも行かないで、ずっとわたしの側にいて下さい」

思い返す度に赤面してしまう、と彼女自身が後述するように、しらふではとても口に出来ない言葉をフィオナは辿々しく、しかし聞き間違いが起らないほどはっきりとした声量で口にした。

彼らが男女の一線を越えたのは、その夜のことであった。

フィオナは、自分よりもひと回り以上年長の元職業軍人を初めての“男”として自らの中に迎え入れた。

ヴァルターは、いまだ少女の趣を残す己が主人をその両腕で掻き抱くことで、求め、そして求められる喜びを再認識した。

ふたりが初めて結ばれた次の日、馬鹿正直にその事実を告げたヴァルターの前でイエルネフェルト教授はまず啞然とし、次いで声をあげて笑い出した。

「君という男は、私が想像した以上に糞真面目な人間なのだ」教授は素直にふたりの関係を祝福した。

願わくばこれからもアナトリアの人口増に努めてくれたまえ、と似合わない冗談まで口にしたのけた。

その教授が亡くなったのは、一昨年の暮れだった。

脳溢血による突然死、であった。

教授の持つ専門知識と豊富な経験とを軸にしたさまざまな技術を主力商品として扱うアナトリアは最善をつくして彼の命を救おうとしたが、事態は完全な手遅れとなっていた。

たったひとりの肉親を失い失意のどん底にあったフィオナを支えたのは、常に彼女の側に身を置くヴァルターの存在だった。

彼は表立って優しい言葉こそ掛けはしなかったが、決してフィオナに孤独感を与えるような真似もしなかった。

それは、あたかも亡国の姫君に付き従う忠勇の騎士のごとくで

あつた。

「ねえ、聞いてくれる？」

ふと思ひ出したようにフィオナが言った。

傍らに置かれたヴァルターの手に、そつと自分の手を添える。

「わたし、夢を見たの」

「どんな夢だ？」

煙草の火を灰皿の上で押し消し、ヴァルターはいささかぶつきらばうな口振りで彼女の言葉を促した。

口調が乱暴であってもそれが彼が持つ不器用さの表れであることをよく知っているフィオナは、そんな些細なことを気にしたりしない。

それゆえ、きちんと会話の主導権を受け入れられたと判断した彼女は、心底嬉しそうな笑顔を浮かべて語り出す。

森と湖に挟まれた自然の豊かな土地に、わたしたち、小さな家を建てて住んでいるの。

木の臭いがするログハウスみたいな、本当に本当に小さな家。

あなたはその土地で、畑を耕したり、薪を割ったり、釣りをしたりして、自然と共存しながら家族を支えている。

わたしは、そんなあなたの帰りを、暖かい夕食を作って迎えるのが日課。

その日は快晴。

透き通るような青空が広がる素敵な午後。

あなたは湖でのひと仕事を終えて、わたしの下へ帰ってくる。

気付いたわたしが手を振ると、あなたはあなたらしく、こう面倒臭そうに右手を挙げるの。

大漁だったのかしら。

少しだけ満足そうな表情を浮かべているわ。

そんなあなたの傍らにまわりついているのが、あなたによく似た感じの小さな男の子。

わたしとあなたの息子よ。

あなたは、その子に生きるための術をたくさん教えながら、毎日伸びやかに生きている。

魚の捕り方、木の切り方、作物の育て方、その他いろいろ。

気の利いた台詞は言えないお父さんだけど、その子には気に入られているみたい。

だってその子ったら、すごく楽しそうに笑っているのだから。

そして、そんな元気いっぱいの子がお母さんって手を振りながら、わたしに向かって駆け寄ってくる。

まだ小さいからかな。

その子は、甘えるようにわたしのお腹に抱きついてきたわ。

大きくなった、わたしのお腹。

その中には、あなたとわたしのふたり目の子供がいる。

きつと今度は女の子よ、って断言するわたしに、あなたは困ったような顔をして、こう言い返すの。

おいおい、生まれてくる子供に今からプレッシャーを掛けるなよ、って。

「なるほど」

ヴァルターは苦笑した。

「俺なら言いそうだな」

「そうよ。わたしはあなたのことを誰よりもわかってるもの」
フィオナはそう言い切って、彼の頬にしばむような口付けをする。

「それでね、夢の最後、わたしはあなたにこう言うの。“おかえりなさい”って」

「いいな。そいつは」

ヴァルターはそう言って、フィオナの頭髮に指を絡めた。

「こんな時代だ。若いうちに隠居を決め込むのも悪くはない」

「でも、問題がひとつあるわ」

上目づかいにフィオナが言った。

「わたし、まだあなたの子供を授かってません」

その言葉を聞いたヴァルターは、なだらかな曲線を描く彼女の肩を愛しげに抱いた。

掌に直接彼女の体温を感じながら、彼は問う。

「欲しいのか？」

「もちろん」

フィオナは即答した。

「これでも一応、オナナですから」

彼女の上体を覆う純白のシャツが、するりと音もなく落ちた。形のよいふたつの膨らみが、月明かりに照らされて美しい曲線を描く。

わずかに顎を上げ、ゆっくりと誘うように目をつむるフィオナ。ヴァルターはそんな彼女の意をくみ、おのれの唇を彼女のそれと静かに重ねた。

そして、そのまま倒れ込むように彼女と肌を合わせる。

唇同士の接触は、やがて激しい舌の絡まりへと発展した。

女性特有の甘い体臭が湧き立ち、ヴァルターの男性が反応する。彼の手が、指が、唇が、舌が、全身を隙間なく這い回るのを、フィオナは恍惚とした面持ちで感じていた。

ヴァルター以外の異性を知らない彼女ではあったが、それでもなお彼がまるで宝物でも扱うような態度をもって自らを愛してくれている事実を疑うものではなかった。

彼の右手が秘所への愛撫を開始した時、軽い絶頂が彼女を襲った。

小さく呻いて思い人の肩に爪を立てる。

ヴァルターの皮膚がわずかに裂け、うっすらと血がにじんだ。悪い癖だと自分でも思う。

しかし、ヴァルターがそれを責めたことは一度もない。

“受け止められている”

そのことを実感する。

ふたたびオナの高まりが全身を満たす。

嬌声を押さえられない。

誰に学んだ訳でもないのに、自然とオトコを喜ばせる声が出るというのは本当に不思議なことだ。

ヴァルターの下で、フィオナの肉体が二度三度と跳ねる。

いつしか、その両手は彼女を責める男の背中に回されていた。

またしても高波が押し寄せ、フィオナの爪がヴァルターの背を傷付ける。

限界だった。

熱く潤んだ瞳をヴァルターに向け、彼女は必死に何かを訴えた。もうその懇願は言葉にはならない。

だが、それだけで十分だった。

ヴァルターは眼だけで了承の合図を送ると、勢いよくフィオナの中へと侵入を果たした。

待ち望んだ一体感が訪れ、彼女は激しくおとがいを反らした。理性が決壊し、視野が狭窄する。

全身をすり寄せるようにして、彼女は悦楽を求めた。

神が定めた男女の摂理。

人が人であるための生命の営み。

求め合い、受け止め合う。

お互いの魂までもが混同し、重なり合ってしまいそうな、その刹那。

彼女にとって、本当にいるべき場所がここにあった。

ヴァルターも限界が近いのだろう。

そのたくましい両腕が、彼女の身体を強く強く抱き寄せる。

フィオナもそれに合わせるがごとく、彼の身体に四肢を絡めた。腰から発生した稲妻が、一気に脳天を貫いたのはその時だった。

声など出ない。

頭の中が瞬時にして白濁した。

全身が強張り、思わずヴァルターの肩口に噛みついてしまう。

フィオナ！

ヴァルターが耳元で名前を呼んだ。

こらえていた何かが、その瞬間堰を切ったように溢れ出た。

ヴァルターがフィオナの体奥で猛々しく自分自身を解放した時、彼女もまた、天国への階段を勢いよく駆け上っていった。

傭兵（2）

「忙しいところわざわざ呼び出して済まなかったな、ふたりとも。まあ、そう固くならず座りたまえ」

エミール・グスタフはそう言って立ち上がり、自らふたりに席を勧めた。

初老と言っているいい年齢の男性だ。

いささか頭の固い、それでいて博識な大学教授を思わせる風貌を有している。

その“見てくれ”のせいかどうかはわからないが、彼がコロニア・アナトリアの実質的な最有力者であることをいまだに信じようとならない輩もいると聞く。

あの男は誰かの傀儡に違いない、という安っぽい陰謀論の類である。

なるほど言われてみれば確かに、落ち着いた渋めの背広でその身を固めていてもエミールの容貌は俗に言う“政治家”という印象を衆目には与えない。

もちろんそのためだけではないのだろうが、一部の勢力から彼には政治の分野に必要とされる個人的資質が欠けているのではないかと疑われていることもまた、紛れもない事実であった。

しかし、イエルネフェルト教授亡き後、いささか土台の傾いたコロニア・アナトリアが、その舵取りをとにもかくにも破綻させずに今日を迎えられたのは、エミールが密かに隠し持っていた政治的才能によるところが大きい。

無責任な人々がいかに思おうとも、その一事を否定出来る識者は現実を熟知している者に限って言えばまさに皆無であった。

ヴァルター・ノボトニーとフィオナ・イエルネフェルトが名指しで彼に呼び出されたのは、本当に突然の出来事であった。

エミールは故イエルネフェルト教授の旧友とも言える間柄であ

ったから、フィオナはもちろんヴァルターとも十分な面識がある。

当然、今の二人がどのような関係にあるのかも彼は完全に認識していた。

だが、彼らがそろって指名を受けたのは、そういった私的な縁故に則つてという訳ではどうもなさそうだった。

彼らがエミールの執務室へと招かれたのは、午後の二時。

普段であれば、両者とも自分に与えられた職務に邁進しているべき時間帯である。

市街地中心部に屹立するコロニー庁舎へとふたりが到着した時、ヴァルターは警備部隊ガードが使用する制服を少々着崩した形で身にまとい、フィオナはそれと対称的に派手さのない地味なスーツをきつちりと隙なく着用していた。

そんな両者が並んで立つと、まるで反骨心旺盛な不良学生と真面目一本でやってきた優等生とのカップルがそのまま年を取ったかのとき雰囲気がある。

エミール・グスタフという人物が公私混同を好まない堅物であることをふたりは必要以上に知っていた。

だから、この招集が何か公の目的を持ったものであるのだと、フィオナもヴァルターも誰に言われるまでもなく確信している。

ただし、その理由に関しては両者ともまったく聞かされておらず、庁舎の前で予想外の対面を果たした両名はここに至るまで少なからず困惑の色を隠すことが出来ずにいた。

エミールがふたりを招き入れた部屋の中には、彼自身と彼の秘書——と言うよりは技術交換の名目で「企業連合体」を構成する大企業のひとつ「レオーネメカニカ」社から派遣された補佐役アドバイザーである、セレン・ヘイズ女史がいた。

セレンは、その西欧的な名前とは異なり明らかな東洋風の外見を持つ才女であり、今年で二一となるフィオナよりも若干年長だと聞いている。

長い黒髪を後頭部で束ね薄い眼鏡を掛けた彼女は、身体の線を

強調した紺のスーツをまとったその姿にも左右されているのだろうが、いまだ少女の雰囲気卒業出来ないでいるフィオナと比べると年齢差以上に大人の雰囲気を漂わせる女性であった。

しかし、その瞳はあくまでも冷たく鋭い。

かつて彼女を見たヴァルターは、フィオナに向かって「あの女は、まるでむき身の刃だな」と評したことがあった。

そのセレンがいた珈琲の置かれたテーブルに、ふたりはエミールに勧められるまま並んで着席した。

執務席を離れたエミールとセレンとが、彼らと向かい合うようにして腰を下ろす。

「少佐。防衛部隊^{ガード}の状況はどのようなものかね？」

まるで世間話を切り出すようにエミールが口を開いた。

“少佐”^{メジャー}とは、アナトリアでヴァルターに与えられたいわゆる名誉階級だ。

それは、彼が保有していた軍の最終階級に由来する。

現実には、「軍隊」という官僚組織を持たないアナトリアにそういう名を持つ組織的階級は存在していなかった。

異なことを聞く、とヴァルターは感じた。

部隊の訓練状況に関する報告書であれば、きちんとしたものを定期的に上げているはずだ。

もちろん、わざわざコロニー代表に名指しで呼び出されてまで報告しなければいけないほど重要な内容でもない。

「標準型^{ノーマル}AC部隊に関しては“実戦”で使える練度にあるのが、まあ全体の三割といったところですよ」

違和感を感じながらも、ヴァルターは淡々と彼の問いに答えた。「それ以外に関しては、治安維持任務に就けるのがようやく、というレベルでしょう。武装勢力による襲撃を受けた場合、かなりの耐久を図ることは可能ですが、現状では小隊長以上の指揮官が完全に不足しています」

専門的な教育を受けていない素人がパートタイム的に戦闘部隊

を編成したところで、それは“烏合の衆”にしかなりえません。ヴァルターはそう言いかかったが、辛うじて喉の奥で押し止めた。

仕方がないのだ、と彼は思った。

コロニーの防衛部隊が望んでいるのはあくまでも重装備の“警察権力”であり、文字どおりの“軍事力”ではないのだから。

もちろん、アナトリアを束ねる地位にあるエミールもそのことは熟知しているはずだった。

優秀な為政者であればあるほど、軍事面に暗い確率は加速度的に減っていく。

例え、それらの標榜するスローガンが“絶対平和”などというおとぎ話であつてもだ。

「なるほどね」

いかにも感心したかのような態度を装って、エミールは言った。

「名にしおうAC特殊部隊『エクスカリバー』の元隊長。八四機撃墜の伝説的AC乗り、^{レイウン}『ジェットストリーム・ヴァルター』がそう言うのなら、それが真実なのだろう」

ジェットストリーム・ヴァルター。

それは、ヴァルター・ノボトニーが泥沼のユーラシア戦線において初のトリプルエースとなった時——すなわち、彼が一五個目の撃墜マークを乗機に刻んだおり、当時の報道機関がたてまつったふたつ名であつた。

解決の糸口すら見えない局地戦の連続に根をあげかけていた政府や国民は、例えそれに何の意味もなかつたと知つてはいても、軍事的“英雄”の登場に熱狂した。

あるいは、そうしなくては人としての理性を保てなかったのかもしれない。

もっとも、それを知つたヴァルター自身は、「勲章だのなんだのよこすくらいなら、ACの一機でも持つてこい」と、従軍記者に毒突いたそつだ。

エミールは、おそらくそのことを十分にわきまえた上で彼の実績と異名とを口にした。

エミールは、偏屈な学者のように無意味な言葉の羅列を心底忌避する傾向がある。

その彼が一度言葉を発したからには、必ず何かの意味があるはず――黙ってコーヒークップを口に運びながらフィオナはそう感じていた。

エミールの言葉が終わるのを見計らって、セレンが幾ばくかのファイルをヴァルターと、そしてフィオナとの前に差し出した。

厚みは大したものではない。

ただし、その表紙には“外秘”の文字が赤く記されていた。

それを見てヴァルターはかすかに眉をしかめ、フィオナは少しだけその目を丸くする。

「君たちふたりに来てもらったのは、その計画に協力してもらいたかったからだ」
プロジェクト

そんな両者の様子を省みることなく、エミールは彼らに告げた。

「我がアナトリアは、新しい産業として“傭兵業”マーセナリーを選択することとした。議会には根回しが済んでいる。今日は君たちから忌憚なき意見を聞きたいと思っている」

「傭兵……ですか？」

その発言が、余りにも突拍子なく聞こえたのか、フィオナの口からたちまち否定的な疑問符がこぼれ出る。

「到底現実的な案とは思えません」

彼女は軽く目を伏せ、頭を左右に振ってみせた。

いや実のところ、フィオナはそんなことを言いたい訳ではなかった。

エンジニア彼女が内心でエミールに尋ねたかったのは、なぜ自分のような技術者にそんな議題が提示されたのか、ということだった。

今現在、フィオナはアナトリアの技術研究所にて企業から依頼されたAC制御技術の研究開発に従事している。

研究所内において彼女は頭ふたつ分ほどの若輩者ではあったが、父親であるイエルネフェルト教授から直接指導を受けたことを理由として、現場では高い発言力を有していた。

間違いなく、アナトリアにとって重要な人材のひとりと言える。だが、本件はそのような技術面とは無関係で、完全なる軍事の範疇にこそ存在していた。

アナトリアでは希少種^{レッドデータ}とすら言えるヴァルターのような“正規軍人”であるならいざ知らず、自分のような軍事の素人に意見を求めるべき内容だとは到底思えない。

彼女は、ふと隣に座るヴァルターへと視線を移した。

彼は無言でファイルのページをめくっていたが、とある箇所ですその手を止めた。

その目が一瞬見開かれ、視線が一点に集中する。

「何があつたの？」と、問い掛けようとするフィオナを無視して、ヴァルターは震える声でつぶやいた。

「……ネクスト」

「え？」

彼女はその言葉に反応し、自らも手元の資料をあわてて開く。そのページには、コロニー・アナトリアが保有する研究用のネクスト機体が詳細なデータと共に載っていた。

「『ノートウング』……なぜ？」

フィオナは一瞬絶句して、次いで真向かいに座るエミールに視線を投げた。

この時、彼女ははつきりと理解した。

自分が必要とされたのは、このためだったのか、と。

ネクスト。

「国家解体戦争」において「企業連合体」が一方的な勝利をおさめる原動力となった、人類の生み出せし鋼鉄の破壊天使^{デミモン}。

それらが戦場に出現した時、その想像を絶する“力”の源を知

る者は、彼らを生み出した「企業連合体」内部においても極少数であつた。

しかし、「国家解体戦争」が終結して数年が経過した現在、その謎の一端はすでに万人の知るところとなつていた。

今やノーマルと呼称されるようになった従来型 A C とネクストとを明確に分けるものは、いわゆる「コジマ技術」と称される一連のテクノロジーであつた。

「国家解体戦争」をさかのぼること数年前に発見され、「企業連合体」の一角である「アクアビット」社によつて実用化された新物質——発見者の名前を取つて「コジマ粒子」と名付けられたその物質は、主にエネルギー分野において人類に大幅な技術革新をもたらした。

いや、革新どころの騒ぎではない。

それはまさに“革命”であつた。

特に、大出力ジェネレータの燃料となる超高密度水素吸蔵合金の開発と超高出力非化学ロケットの実用化は、兵器開発のさらなる進化をも呼び起こす引き金ともなつた。

ネクストにはこの双方、それも最新技術を惜しみなく注ぎ込まれた新製品がコストを度外視して投入されていた。

ゆえにネクストは、従来型の地上兵器が決して手にすることの叶わなかつた圧倒的な機動力を、文字どおり自家薬籠のものと出来たのだつた。

蓄積されたコジマ粒子を一気にプラズマ化することで爆発的な推力を得る「クイックブースト」「オーバードブースト」と呼ばれる推進システムは場合によつては瞬時に亜音速を超えるほどの、すなわち最先端の航空機にすら匹敵する加速力を地上兵器の亜種に過ぎないネクストに付与することとあいなつた。

陸上兵器の機動力が航空機を凌駕する。

それは、陸戦を主体とする機動兵器にとつてまさしく夢のような出来事と言えた。

加えてネクストに搭載されたコジマ技術を象徴する「プライマルアーマー《PA》」と呼ばれる不可視の防護膜^{バリアー}。

濃密なコジマ粒子を機体周囲に安定して還流させることで接近してくるすべてのエネルギーを減衰させるという、まったく新しい形式の防御システムだ。

これにより対PA対策を考慮していないこれまでの兵器——単純な質量、熱、速度を主な原理として目標の破壊を目論んだ攻撃手法は、そのほとんどがネクストにとって螻蛄の斧と化してしまった。この両者を「剣」とし「盾」としたネクストが、古い時代の延長に過ぎない従来型の兵器群をもつてしなかったのは、まさしく“進化の現実”そのものであったと言える。

優勝劣敗は、神ですら否定出来ない残酷な理であったのだから。だからこそ、それは当面の勝者たるネクストをも見逃してはくれなかった。

技術の発展は、現在の最新技術を容易に過去のものへと変化させてしまうからだ。

ゆえにこそ、「企業連合体」は自社のネクスト技術をさらに先へと進めんとして、今この瞬間にも様々な研究努力を怠っていない。

そして、コロニー・アナトリアはそんな企業群によるネクスト技術開発競争の、いわゆる“おこぼれ”を授かることにより辛うじて生き長らえてきたのだった。

「国家解体戦争」が終結し多くの人々がコロニーに押し込められようとしていたところ、アナトリアはそのAC制御技術の専門性を最大の商品として「企業連合体」との間に独自の利害関係を構築していた。

“ネクスト制御技術の提唱者^{バイオニア}”の手による、新しい商品の開発と洗練。

イエルネフェルト教授の存命中、「アナトリア」は「企業連合体^{メガコングロマリット}」の中核をなす六つの巨大複合企業群——「グローバル・アーマ^A

メンツ」、^B「ベルナルド・フェリックス・ファウンデーション」、
「イクバル」、^F「ローゼンタール」、^F「インテリオル・ユニオン」、
「レイレナード」——俗に「ビッグ・シックス」と呼ばれている
それらの間を極めて巧妙に渡りきった。

本来なら単独の企業グループを相手とする経済活動のみを許されるコロニーとしてはまったくの例外的に比較的自由なそれをアナトリアが行えたのは、文字どおり教授の知識と名声によるところが大きかったのである。

であればこそ、教授の死がアナトリアの根幹を揺るがすこととなったのは実に必然的な出来事だと言えた。

エミールは蕩々と語った。

教授の死によってアナトリアは技術的な専門性を失い、今や存亡の危機にあると言ってもいい。

天然資源に乏しいアナトリアはこのままではいずれかの企業グループによって自由を奪われ、他のコロニーと同様、経済植民地として取り込まれてしまうだろう。

ゆえに、アナトリアは現在手元に残る“資源”を最大限に駆使し生き残りの道を模索しなくてはならない。

その手段のひとつが、中立の立場ですべての企業に分け隔てなく“軍事力”によるサービスを提供する“傭兵業”であり、アナトリアはその手段を実現化するための強力なカードを保有している。

「それが、我々が保有する技術試験用のネクスト機体『ノートウング』の存在だ」

静かだが力強く、彼は断言した。

「ノートウング」——神話の英雄ジークフリードが手にする龍殺しの魔剣。

その名を与えられたネクストは、エミールが言うとおりアナトリアがAC制御技術を開発するために保有していた、いわゆる試験用機体である。

一概に試験用と言っても性能的には決して馬鹿にしたものではない。

機体を構成する各種のパーツは「ビッグ・シックス」が自社ネクストのために開発した部品とほぼ同等の能力を発揮する代物であり、その中には運用テストのために持ち込まれた生産前の試作品プロトタイプすらもあったのだから。

フィオナは、手元の資料に記載された「ノートウング」のデータを何か禍々しいものでも見るかのように凝視していた。

ノーマル、ネクストを問わず、これまで生産されて来たACにはそれ以前に国家が保有していた兵器とは明確に異なる独特の機能があった。

それは「工業規格の共通化により、各部のパーツを自由に交換することが可能」と、いうものである。

すなわち、ACは機体の各所を必要に応じて選択しそれらを組み合わせることによって、まったく性能の異なる機動兵器へ生まれ変わることすら出来るのだ。

当然「次世代型AC」であるネクストも、使用用途に応じたパーツを積極的に選択することでさらなる先鋭化が可能な構造となっていた。

しかし、現在存在が確認されている有力ネクストの多くはそれらを所有する企業グループによって開発されたパーツのみで構成アーキテクトされているのが実情である。

なぜか？

理由はしごく簡単に想像出来た。

いかに連合を結成したとはいえ、本来ならば「企業連合体」バックスに所属する各社は企業活動的な面で完全なる「競争相手」に過ぎない。その彼らが、自社の技術力の結晶であるネクスト用部品をそう易々と同業他社相手に販売する訳がないのは当然だ。ライバル

おそらく、運用されるネクストの数が増え、それらが一定の市場を形作るようになるまではこのままの状態が続くだろう。

もつとも、アナトリアのネクストがいかにそうしたしがらみに捕らわれないからといっても、それは利点のみを生む訳ではない。

先にアナトリアへ提供されたネクスト用部品が企業の保有するネクスト機体に使用されたものと“ほぼ”同等の能力を発揮すると評したが、それはつまり実際の性能面で対等以下の可能性が高いということにも言い換えられる。

当たり前と言ってしまえばそれまでだが、狡猾な「企業連合体」各社が自社の企業秘密を、いかに中立の立場を標榜しているとはいえ第三者に公開する訳もないのである。

だが、何はともあれアナトリアのネクストが、ACと呼ぶにふさわしい機体構成の柔軟性を獲得出来た事実は極めて大きな意味を持つ。

「ノートウング」は、ACとしては標準的な人間型の外見を有^{ヒューマノイドシルエット}していた。

ただし、その四肢は一般的な人体と比較して見るからに図太くある意味奇形的ですらある。

それは本機の機体本体^{フレーム}がもつばら防御力と積載量を重視して構築されたことを何よりも雄弁に物語っている。

そして、脚部が持つ大きな積載容量を贅沢に使用することで搭載を許されたその兵装は、彼女に求められた性格を明確にうかがわせていた。

右腕部マニピュレータには「メリエス」社製の高出力レーザーライフル。

左側下腕部には「オーメル」社が開発した近接戦闘兵器^{プロトタイプ}の試作品^{イフ}。

背部左側には「有澤重工」社の伝統的な逸品である二五四mm^{一〇インチ}多用途榴弾砲。

それらの武装を背部右側と左右の肩にそれぞれ装備された「MSACインターナショナル」社の誘導弾^{ミサイルボット}投射機が支援する。

一見すると不必要なまでの重武装。

それは、間違いなく単機でもってさまざまな戦場へ対応することを目論んだ選択であった。

なるほど、確かに様々な企業の部品を寄せ集めただけの“ろくななし”ではあるが、「上」は少なくとも本機をノットウングまともに運用する意思だけは持っているようだ。

厳しい表情を崩すことなく、ヴァルターは内心でそんな評価を下していた。

ネクストを使用した傭兵。

その存在を魅力的だと捉える一派はあることだろう、と彼は思った。

なんと言っても、ネクスト一機の持つ戦闘力は従来型の兵器で武装した中規模の戦闘部隊を完全に凌駕するのである。

それは、四年前の「国家解体戦争」での実績によって、そして何よりもヴァルター自身が得た余りにも苦い経験によって完全に証明済みの現実だった。

また、既にネクストを保有し運用している「ビッグ・シックス」メリットにしても利点はある。

数少ない虎の子である自社ネクストを地域紛争のような煩わしい雑用から解放することが可能となれば、彼らはそれをより政略的な任務に差し向けられるからだ。

もちろん、単なるコロニーに過ぎないアナトリアがある意味で「企業連合体」の象徴とも言えるネクストを運用することに、彼らはバックスいい顔をしないだろう。

それらを説き伏せ現実的な立場を容認させるには、疑いなく老練な政治力が要求されることとなる。

もつとも、本件自体に「企業連合体」が最後まで抵抗してみせるような真似はしまい、とヴァルターは予想していた。

利潤を求める企業にとって平時に維持しておくべき「即応兵力」、その軍事的負担を他者に委ねておけるというのは相当の旨味があ

るからだ。

とは言つものの、その場合は兵力を委ねる相手があくまでも“忠実である”という条件が付く。

しかし、おそらくはこの点でも「企業連合体」はアナトリアの提案を無碍にはしないと思われた。

どのみちコロニー単独では、わずか一機のネクストを保有したところで到底「企業連合体」に刃向かうことなど出来はしない。

自給自足の手段を自らの勢力圏に持たないコロニーにとって、「企業連合体」との経済交流が断たれるということは、そのままコロニーそのものの滅亡に繋がるからである。

であればこそ、「企業連合体」が“役に立つ番犬”として「アナトリアの傭兵」を認める可能性は相当に高かった。

一見して荒唐無稽の案に思えた本件も、改めて現状を深く洞察すれば意外と良案に思えてくる。

策士め。

ヴァルターは険しい視線を、目の前で微笑みすら浮かべているエミールに送った。

狐の尻尾をどこに隠し持っていた？

「本機を見てどんな評価を下すかね？ ノボトニー少佐」

その視線の意味を知ってか知らずか、エミールは、唐突にヴァルターへと話題を振った。

ヴァルターは答えた。

「部隊連携による火力支援を考慮に入れない運用を行うのであれば、少々機動力を犠牲にしても火力と防御力を重視した本機のコンセプトに誤りはないと考えます。搭乗者の技量にもよりますが、機体の運動性は腕で補うことが出来ても火力と防御力はそうもいきませんから」

「まるで他人事のように言うな、君は」

苦笑してエミールは言った。

「まあ、気に入ってもらった、と捉えておくことにするよ。そ

れでよろしいかな？」

「どういう意味でしょうか？」

もったいぶったエミールの物言いに、思わずヴァルターは反応した。

「仰っていることが、よくわかりませんが」

「おお、そう言えばまだ本題に踏み込んではいなかったな。私としたことが済まなかった」

大袈裟な態度でわざとらしく驚いてみせたエミールは、次の瞬間有無を言わせぬ政治家の顔となってヴァルターに告げた。

「本機に搭乗を予定しているのは君だ。『ジェットストリーム・ヴァルター』」

「自分が、でありますか？」

ヴァルターが驚きの声をあげた。

それは、いつもの彼らしからぬ情緒反応であつた。

現存する兵器として比類なき戦闘実力を有する「次世代型AC」アイマードコア・ネクスト

しかし、その登場はかつてのノーマルのごとく既存の兵器を押しわけ軍事史に特筆すべき状況変化を引き起こしはしなかった。

もちろん、“旧時代の主力艦なみ”とまで評される膨大な生産コストはネクストをもって主力兵器となさしめぬ大きな一因には違いない。

だが、その根本の理由はそれではなかった。

ネクストには、現段階の技術では乗り越えられない、ある意味で致命的な欠陥が存在していたのだった。

そのひとつは、ネクストがネクストたる由縁、コジマ技術に由来するものである。

ジェネレータ 推進装置、そしてPA。プライマルアーマー

コジマ技術を根幹機能として使用するネクストは、その行動にともない必然的に外部へと大量のコジマ粒子を放出する。

特にコジマ粒子で構成された障壁と言ってもいいPAを展開し

た際、それが顕著な数字を示すことぐらいは子供でもわかる理屈だ。問題は、このコジマ粒子が生体に対して極めて有害な効果をもたらす悪質な環境汚染物質だということだった。

その有害性は、かつて人類が実用化一步手前にまで到達していた原子力——いわゆる、核分裂反応によって生産される放射性廃棄物にすら匹敵する。

両者の違いは、コジマ粒子が放射線を発生させず次世代に遺伝的な影響を残さないことぐらいだった。

一定量のコジマ粒子を取り込んだ生体はその生命活動を著しく減衰させ、極めて短期間で衰弱、遂には死に到る——という研究結果が研究用動物を使用した生体実験にて確認されていた。

その毒性は、特定種の重金属による中毒症状に比較的近い。

加えて自然界に存在する天然物質でないコジマ粒子は、人の手により物理的な除去作業を行わない限りほとんど永遠に毒性を保ち続けるのであった。

ネクストが投入された地域は、多かれ少なかれこのコジマ粒子による環境汚染を覚悟しなくてはならない。

それゆえ、運用する側としては継続した長期間の作戦行動にネクストに従事させる訳にはいかなかった。

そんなことをすれば、拡散したコジマ汚染を收拾出来なくなってしまうからだ。

その投入条件の難しさゆえ、今のところネクストはいわゆる機動打撃兵力としての運用しか許されてはいない。

拠点襲撃や集結した敵部隊に対する一撃離脱以外に使用できる環境が存在しないのである。

どれほど圧倒的な戦闘力を発揮しようとも主力兵器として考えた場合、これだけで絶望的な大問題であった。

そして、もうひとつの理由がネクストを操る搭乗者に関する問題だ。

言うまでもなく、ネクストが保有する圧倒的な機動力はその戦

闘力を語るには欠かせない要因である。

ただし、その尋常でない運動性は既存の操縦システムで制御することが実質“不可能”と判断されていた。

それを実現するためには、状況判断から実際の操作に到る反応速度に生体の神経速度に匹敵するものが必要との試算がなされていたからだった。

人体が外部からの情報を認識し、大脳がそれを判断、そして肉体に行動を命じて機械を操作する——という一連の動作には約二・五秒が要される。

それは、人間が人間である限り決して越えることの出来ない限界であつた。

もちろん、高度な訓練によつて本来なら大脳で行うべき状況判断を肉体の反射行動に委ね、限定的にその壁を突破しようする試みはある程度の成功を収めていた。

特に近代的な軍隊においては、緻密な操作を求められる機動兵器の運用をまかされた優秀な兵士たちに対し学術的にも確かな効果が認められる濃密な鍛錬トレーニングが施されてきた。

しかし、それはあくまでも対処療法に過ぎなかつた。

ネクスト登場以前、一騎当千の活躍で戦況を左右するとさえ言われたノーマルACの搭乗者パイロット——死を招く不吉な存在という意味を持つ「渡り鴉レイザン」の異名で呼ばれた彼らですが、結局は単独での戦闘能力向上を半ば断念し、部隊運用と戦術行動を中軸にして戦うようになっていた。

ひと握りの人的資質にすべてを委ねるよりも、優秀な組織としての戦闘部隊に頼る方が結果的には有効となる。

“法則と物量”の思想。

「国家解体戦争」が勃発するまで、その思想は満点とは言えないまでも十分に合格点を与えられる回答だと思われていた。

ネクストの登場がその常識を打ち破った。

それらを開発した「企業連合体」の技術者は、従来の常識をく

つがえすだけのシステムを開発し、既に現実のものとしていたのだ。
った。

それは「AMS」と呼ばれるシステムであった。

平たく言えば、搭乗者の感覚を機械そのものと電氣的に同調させ搭乗者自体を一種の生体コンピュータとして運用するシステムの
ことだ。

AMSを通じてネクストの統合制御体と接続した搭乗者にとつ
て、ネクストの目は己の目であり、その腕は我が腕となった。

まさしくマン・マシン・インターフェイスの究極の姿だと言っ
ていい。

それは、最先端の脳生理学、神経科学の勝利であった。

これにより、ネクストに搭乗する操縦者は従来のAC操縦者に
付けられた通称「レイヴン」とは区別され、「機械と接続する者」
という意味から「リンクス」と呼ばれるようになる。

選ばれたひと握りの戦士が戦場を支配する。

太古の昔に人類が通り過ぎた戦争の、それは再来だとすら思わ
れた。

AMSを活用さえすれば、それまで複雑極まりない操作を要し
た機動兵器の操縦——搭乗する人間に合わせて性能のデチューンす
ら行われていたそれらの宿痾を、ほぼ完全に取り除くことが可能だ。
最先端技術により構成されたネクストによる赫奕たる戦果が、
それを何よりも雄弁に物語っている。

否定する者は誰一人としていなかった。

しかし、それには致命的な前提条件が存在していた。

AMSによりネクストの制御系と一体となるリンクスには、一
極めて特異な知的能力が要求されるのだ。

想像してみればわかるかもしれない。

ネクストを操縦する際、搭乗するリンクスは自らの肉体を制御
する一方で、もうひとつ、ネクスト本体という別の身体をも“認識
”し続けなくてはならないのである。

それは、後天的な経験によって獲得することが難しい、文字どおりの“才能”に等しかった。

生まれつき備えた特殊能力によってでしか制御出来ない兵器――コントロールそんなものが「軍隊」という組織の中で根幹をなすことなど、ありえる話ではない。

そもそも、人間が人間によって形作った“組織”という制度そのものが、社会の大多数を占める「凡人」によって運営されることを前提として成立しているのである。

仮に技術が進歩しリンクスの量産が可能となった場合でも、賢明な社会主体である「企業連合体」は、軍事力の中核にネクストを置くことはないであろう。

それは、制御困難かつ代替不可能な“特定の個人”という代物に絶大な力を与えるのとイコールであるからだった。

この時、ヴァルターが見せた驚きの原因となったのはそこであつた。

確かに、レイヴンとして幾多の戦火を潜り抜け伝説的とすら呼ばれた彼ではあつたが、その実績はネクストを操る資格を約束するものではない。

ネクストを操縦するにはAMSに対する適性を有している必要がある訳だが、彼はその要件を満たしていなかったからだ。

だから、本件をエミールから聞かされたヴァルターは自らの役割を純粹に戦闘指導官である^{コンバット・アドバイザー}と予想し、今の今までその腹積もりでいた訳である。

それがくつがえつたのだ。

まさしく降って湧いたような展開にヴァルターが思わず目を丸くするのも、やむをえない話であつた。

「先日行った演習の際、アナトリアのノーマル搭乗者すべてに対して秘密裏にAMS適性の検査を実施した」

そんな彼に向かって、こともなげにエミールは告げた。

「その結果、君にAMS適性が発見されたのだ。微弱な数値ではあったがね」

彼はその目をわずかに細め、こころなしに首を突き付けるような態度を垣間見せつつ次のように言葉を続ける。

君たちも知っているとおり、アナトリアの経済は逼迫した状況にある。

従って、本件に関しても悠長な時間を掛けていられないというのが現実だ。

もちろん、AMS適性の持ち主をもつと根気よく調査すれば、君よりも優れた数値を発揮する者が現れるかもしれない。

しかし、その人物が実戦において使いものになるかどうかはまったくの未知数だ。

比較して君ならば、そう「ジェットストリーム・ヴァルター」という異名を戴く伝説的なレイヴンである君ならば“戦士”としての経歴に問題はない。

繰り返し言うが、我がアナトリアには時間がないのだ。

新しい戦士を育成する猶予が我々に与えられていない以上、君に代わる人材など思いも寄らない。

「もちろん、この場ですぐに返事をもらおうとは思っていない」「エミールは、こう言って言葉を締めくくった。

「明日の昼まで考えておいてくれたまえ。よい回答を期待している」

傭兵（3）

ヴァルターとフィオナの両名が退室した後、エミールはいささか疲れを滲ませた溜息をひとつついて、軽く胸元のネクタイを緩めた。

彼らの前ではきちんとそろえていた両脚を今はだらしく組み、ソファの背もたれに右腕を掛けてすらみせる。

傍らに立つセレンの眼などそもそも考慮にすら入れていない、そんな態度であつた。

内心で彼は毒突く。

こんな役目はもとより自分が背負い込むような代物ではないのだ。

大体一介の機械屋に過ぎない自分のような人間が国家元首の真似事を演じなければならない事態に陥ることこそ、本来ならばあつてはならないことなのではないか？

無能にして無責任な政治屋どもめ。

腹の底から、そう叫びたくなってくる。

きさまたちが今手にしている権力とやらにふさわしい責任を果たしてさえいれば、アナトリアがここまで追い詰められることにはならなかったのだ。畜生め。

“公正な選挙”によつて民衆から政策実施の権限を委託されたコロニー・アナトリア評議会の面々を思い出し、エミールは多量の苦虫を一息に噛み潰した。

アナトリアを襲つた経済危機は、確かにイエルネフェルト教授の死に端を発する。

しかしながら、彼がこの世を去つたという事態そのものが現状を呼ぶ由来となつた訳では決してない。

それは、あくまでも切欠に過ぎなかった。

教授の死により、それまで彼個人の持つカリスマを旗印として

いたアナトリアは大きくふたつの勢力に分割されることとなった。

教授の教えを受けた技術者たちからなる「研究所」勢力と、主にコロニーの行政を司ってきた「議会」勢力と、にだ。

両者は偉大な指導者亡き後のコロニーが向かうべき道筋について、まったく異なる未来図を描いていた。

前者は“先端技術の寡占化”による独自性をもって企業と対等の立場であろうと目論み、後者は“知的財産の積極的な公開”によって企業との接近を図った。

“アナトリアの独立”というものを考えた場合、一見して研究所勢力の意見が正しいように思える。

だが、事はそれほど単純ではなかった。

議会勢力は、いずれアナトリアの持つ先端技術が他企業にキャッチアップされるであろうことを確実視していたのである。

なればこそ、アナトリアが技術的優位を持っている今のうちに「企業連合体」との太いパイプを築きあげ、より高い値段でそれら売り払うべきだ、と彼らは考えていた。

その時が来てからでは遅い。

議会勢力に籍を置く人々は、そう主張して大きく拳を振り上げた。

これもまた一理ある意見であった。

ただし、議会勢力は“アナトリアの魂”を売りに出した場合の代価に対して、公正中立の立場でいられるほどには無私の姿勢を貫けなかった。

コロニー評議会を構成する“選ばれた議員たち”は水面下で企業が提示した“アナトリアの売価”を目の当たりにした途端、たちまちのうちに醜い勢力争いを開始したのだった。

口先ではきれいごとをうたいながら、まるでアナトリアの未来そのものには目をつむったかのような彼らの姿は、その筋にはまったく興味を示さない人々ですらが鼻白むほどの腐臭を放っていた。

素朴な愛国心を備えた大多数の人々にとって、それは許される

べきことではなかった。

売国奴。

街をゆく一般市民の口からその言葉が評議会へと向けられる回数も、目に見えて増大していった。

私利私欲に目が眩み、自らが何をしようとしているのかすらわからかねていた彼らの頭上に大量の冷や水を浴びせたのは、研究所勢力の一派が行った亡命騒動であった。

ヨゼフ・ピュックラー博士。

イエルネフェルト教授の右腕にして、研究所勢力を代表する、いわゆる「一二博士」と呼ばれた者たちの筆頭。

その彼が「一二博士」の過半を引き連れ、アナトリアのライバルともうたわれた技術開発系コロニー、「アスピナ」へと出奔。

自分たちの生命・財産の保証、そして政治的立場の保護を同地評議会に対し求めたのだった。

アスピナ評議会は満場一致でそれを了承した。

アナトリア評議会からの正式な抗議は一顧だにされなかった。

当然だろう。

ピュックラー博士の“亡命”はアスピナの利に叶うだけでなく、人道的な面から見ても非の打ちどころがなかったのであるから。

アスピナの市民権を得たピュックラー博士とその同調者たちはアナトリア政府の無策・無能をあげつらい、口を極めて罵った。

アナトリアは自分たちの故郷だ。

しかし今のアナトリアは故郷と呼ぶに値しない、とまで言い切った。

この亡命劇を、アスピナが弄した露骨な策謀だ、と喝破する者もアナトリアの内外に少なくはなかった。

だが、それを公然と証明する決定的な材料は存在せず、仮にそれがあつたとしても個人の自由意志という錦の御旗を打ち倒せるだけの説得力を持つとは到底思えなかった。

かくしてアナトリアが持つネクスト関連技術の先進性は、実に

あつさりと失われた。

面前に叩きつけられた現実を目の当たりにした研究所勢力は絶望し、議会勢力はこの深刻さに頭を抱えた。

双方が思い描いていた青写真が文字どおり白紙に戻されたからであつた。

政治的責任を取つて、アナトリアのコロニー評議會は即日総辞職した。

そして、彼らのほとんどが続いて行われる選挙に再出馬しない意向を表明した。

引退を口にする者も多かつた。

身を引いた議員の大半が、後に殊勝な言葉を口にした。

いわく、自らの政治的力量の不足を痛感した。

いわく、コロニー存亡の危機にあたり、より柔軟な考え方の出来る後身へ道をゆずるべく云々。

なんとも耳に心地よい台詞ではあつた。

まるで判を押したかのような類似性がそこに見られなければ、ある程度の説得力を有したかもしれない。

だが、建前の裏に隠された彼らの本音をアナトリアの市民は敏感に察していた。

つまり、沈む泥舟と運命を共にしたくない、ということ。

いつの時代も民衆は、為政者が想像するよりもはるかに優秀で現実認識力に長けている。

それは皮肉なことに真実であつた。

人々が、故郷の舵取りを醜態を晒した議会勢力でなく研究所勢力に委ねることを望んだのは、ある意味で当然の帰結であつた。

本来コロニー・アナトリアはイエルネフェルト教授によつて導かれてきた“技術屋の牙城”であつた訳だから、畑違いの者たちを自らの代表として選出することへの抵抗も、民衆の中には少なかつたのであろう。

一介の機械屋を自認していたエミール・グスタフという人物を

コロニー代表とする直接的な要因がここに誕生した。

残された「一二博士」全員の推薦を受け、研究所勢力をがっちりひとつにまとめあげたエミールは、続く総選挙で勝利を収め、名実ともにアナトリア代表としての地位を確立した。

彼の政権に対する民衆からの支持率は七割を超え、政治的基盤は極めて安定している。

長期政権はほぼ約束されたようなものだった。

例えそれが彼の希望した結果と異なっていたとしてもだ。

エミールが背負い込んだ政権の前途は、あまりにも多難であった。

財政的な水準を示す数多の数値は日を追うごとに低下し続け、債権の引受先に困窮するがゆえに技術研究に要する費用さえもが枯渇しつつあった。

保有するネクスト機体を活用した新たなサービス。

確かにそれはアナトリアを救う窮余の一手であるのだろう。

だがしかし、その実施はこれまで研究所勢力が頑なに拒んできた政治的な独立性に反する結末を引き起こす。

なぜならば、「企業連合体」との摩擦を発生させない範疇での軍事力の行使とは、すなわち「企業連合体」そのものへの接近を意味するも同然であるからであった。

矛盾を抱えた「アナトリアの傭兵」

このプランを聞かされたふたりの人物は、ほとんど対称的な反応を示した。

新たにリンクスとしての役割を提示されたヴァルターが即断を避けた一方で、フィオナは明確に否定的な意志をあらわとした。

「武力の行使を商品にするなんて許される行為ではありません」
彼女は、半ば感情的になってまでエミールに食いさがった。

「ましてや、ネクストを使用するなどもつてのほかです。コジマ汚染について、あなたはわたしよりもはるかに御存知のはずでは

なかったのですか？」

倫理的にはまったく正しい意見と言えた。

積極的に軍事力を用いること。

特にネクストという強大な戦闘力を孕んだ兵器を投入する事例は、凄惨な戦場を形成することが明白であった。

人が人を殺傷する行為が罪なのであれば、武力の行使こそその最右翼と呼ぶべきものであろう。

否定すべき内容は、そこにはない。

だが、彼女が表したその言い分がいわゆる建前に過ぎないことを、この時エミールは完全に看破していた。

彼は、フィオナ・イエルネフェルトという娘がまだ理想主義的な面を色濃く残している事実をほぼ正確に認識している。

なるほど、確かに暴力を用いた金儲けなどは、倫理的に、そして人道的に許容される行為ではないのかもしれない。

だが、人は食わねば生きてゆけない。

例え後世に悪名をもって知られるようになったとしても、民衆を束ねる為政者は彼らの生活を保障する責務を負うのだ。

フィオナは、その一面において間違いなく理想主義者であった。しかしながら、いわゆる莫迦ではない。

むしろ、その聡明さは極めて冷徹な現実主義者に匹敵するとさえ言っていだろう。

それゆえに彼女は、目の前に広がる現実という存在を十二分に理解しているはずだった。

そして、代案を出せない反発が決して建設的な行動ではないということも。

にもかかわわらず彼女が青臭い書生のような発言をした背景には、ヴァルター・ノボトニーという男に対してフィオナ・イエルネフェルトという娘が持つある特定の感情が存在するのだと、エミールは確信していた。

A M Sによって人為的にネクストの統合制御体と同調するリン

クスには、極めて高い精神負荷^{ストレス}が掛かる。

そして、それはリンクスの持つAMS適性が低ければ低いほど飛躍的に増大し、場合によってはその脳神経系に重大な障害を残すといった事例も報告されていた。

軍事専門家であるヴァルターにはピンとこない数字の羅列に過ぎなかったかもしれないが、次世代AC^{ネクスト}について正規の教育を受けたフィオナにとって、手元の資料に掲載されたデータは無視することの出来ない代物であったのだろう。

彼女はその数値を一見しただけで、「ノートウング」との同調^{クリティカル}によりリンクスたるヴァルターが受ける精神負荷を、まさに“致命的”なレベルだと判断したに違いない。

だからこそ、あえて強い言葉で反発してみせたのだ。

己の伴侶となるべき男性をそんな危険な状況へ送り込ませないようにするため。

そして、綺麗事をもってその根拠となした理由は、今は亡き父親への憧憬とも言えるコロニー・アナトリアへの礼儀であろう。

自らの私情を理由に故郷の危機を救うべく立案された政策を否定する。

それを彼女は己の“わがまま”に過ぎないと自己判断したのだ。フィオナには、自分自身が背負い込んだ責務を越えて自らをアナトリアの公だと見なす悪い癖があった。

彼女はアナトリアの為政者ではないし、その責任の一端を担っている訳でもないのに。

おそらくは、生真面目で責任感の強い彼女の性格がもたらした方向性なのだろう。

偉大な父親を持った娘として、そうしなければならぬという強迫観念に捕らわれているのかもしれない。

そんな彼女をよく知っているがゆえに、この時エミールは軽い自己嫌悪に陥った。

自らが巡らした策略の糸を唐突に思い出したからであった。

彼は、ヴァルター・ノボトニーという希有な名声を持つレイヴンが今回の依頼を蹴るなどとは、毛ほども考えていなかった。

優秀な戦士であり正規の軍人として高度な教育を受けてきた士官である彼は、自らが守るべき存在のために己を危険にさらすことを許容するだろう。

フィオナ・イエルネフェルトという娘は彼にその決断をさせるに足る存在であると、エミールは踏んでいた。

それは確信に近い。

低いAMS適正からくる強烈な精神負荷とネクストに搭乗することで避けられない事象である緩慢なコジマ汚染は、間違いなくヴァルターの心身に重大な傷を残すであろう。

自分はそれを完全に理解した上で、それでも彼に依頼をし、そのためにフィオナの存在を利用した。

恩師の愛娘でもあるひとりの女性を、ひとりの男性を政治的に利用するための餌としたのだ。

もちろん、それが間違ったことだとは思わない。

しかし、それが人として正しいことだとも思えなかった。

個人が抱く特別な感情を計算し、一部の人々を意図して危険に晒してまで集団としての利益を図る。

為政者とは、果たしてそれが許されるほどの存在なのか？

その疑問に、自分は“是”の判定を下した。

あまりの傲慢さに吐き気がする。

許されることなら、自らの頭部に銃口を突きつけそのまま引き金^{ガー}を引きたくなるほどに。

「卑怯者だな。私は」

自嘲気味にエミールはつぶやいた。

彼の側に立っているセレンは、そんなエミールの姿を顔色ひとつ変えずただじっと見詰めていた。

そんな彼女に向けて、おもむろにエミールが語りかけた。

「時代遅れの古い戦士。そして政治的な利用価値しかない非力

なネクスト。だが、上手くいけば、これでアナトリアは救われる。約束は守ってくれるのだろうか？ 『インテリオル・ユニオン』は

「我が『レオーネメカニカ』社を含む『インテリオル・ユニオン』グループは、世界に突出した勢力が出現することを望みません』いささか冷徹な雰囲気を感じさせる口調でセレンは告げた。

「アナトリアがネクストを運用することで、『企業連合体』内部におけるパワーバランスを良好に保つ第三者的な手段が成立します。そのための政治的、資金的な援助を『インテリオル・ユニオン』は惜しまないことをお約束します」

限りなく感情を廃し機械的に語られる彼女の言葉に、エミールは歯を見せて苦笑する。

あえて下品な表情を形作ったのは、セレンの台詞に己が抱いた嫌悪感を彼女自身に知らしめるためであった。

ここでも綺麗事か。

「ビッグ・シックス」ともあろう企業が、自陣営の利益を図らぬ訳もあるまいに。

要するに貴様たちは、自らに都合のいい手駒を保持したいだけなのだ。

状況が悪くなれば簡単に切り捨てられる手駒をな。

お前たちの中にあるのは企業の論理、ただそれだけだ。

利益追求のためになるなら山羊の吐瀉物でさえ喜んで口にする輩の言葉など、どこをどうすれば信用出来よう。

「『ビッグ・シックス』のひとつがそう言うのであれば、こちらはそのを信じるしかあるまいよ。どのみち賽は振られてしまったのだから」

エミールは、吐き捨てるようにセレンに告げた。

心中に深く根を張る不審を、かろうじて飲み込むことに成功する。

しかし、彼の口から這い出てきた言葉は発言者の本音を裏切らなかった。

聞かされた者が感情を害することなど、頭から考慮に入れない口振りだった。

もし、いささか賢い交渉者であるなら、支援者から派遣されてきた助言者へそのような言を発することをばかるであろう。

責任を持つ者の言葉とは、常に政治的な重みを持つ。

無思慮なひと言が他者との蜜月にひびを入れることなど、対外交渉の場面では日常茶飯事であるからだった。

その一点から考えると、エミール・グスタフという人物は組織の代表としては及第点を与えられないのかもしれない。

だがもう少し深く考えると、彼がそうした危険性を孕んだ発言を行った根幹には、セレン・ヘイズという女性に対する信頼に近い何かがあったのだとも言える。

時に隠しだてせず本音をさらけ出すこと。

みつともないという向きもあるだろうが、それには時として相手の疑心は無意識のうちに雲散させうる効果がある。

ただし、前提としてそれを耳にする者が冷静で理知的な人物であることが必要だ。

感情に支配されがちな小者では、そういった効果を望むことは出来ない。

心のどこかでエミールは、セレンをそのように評しているのかもしれない。

もちろん、彼自身があずかり知らない部分において、での話だが。

彼は続けた。

「そして、その監視役として送り込まれたのが君という訳だ。ナンバー16『霞スミカ』 わざわざ『オリジナル』のひとりにそんな役目を押しつけるとは、『インテリオル・ユニオン』も剛毅なことだな」

「信頼の証だと思って下されば幸いです」

エミールが口にした皮肉を、セレン——いや「レオーネメカニ

力」社から秘密裏にアナトリアへと送り込まれた企業リンクスである彼女、霞スミカはそう事務的に聞き流し切り返した。

「我々は、貴重なリンクスを差し出してまでアナトリアとの良好な関係を求めているのだと」

現状においてリンクスという存在には、極めて希少な価値がある。

いかに高コストとはいえ、あくまでも量産可能な製品であるネクストとは異なり、生来の資質に左右されるリンクスは工場に増産を命じて作り出すという訳にはいかない。

経験豊かなリンクスとは、企業にとって文字どおりの“至宝”であった。

そういった面を考慮に入れば、スミカの発言には一定の説得力が見出せた。

だが、エミールはその言葉を表面通りに受け取りはしなかった。

「物は言いようという訳か」と、ふたたび率直な皮肉を返す。

「御不満ですか？」

スミカの瞳がきらりと光った。

鋭刃に反射した月光のごとき、蒼く冷たいきらめきだった。

それを見たエミールは思わず口元を綻ばせた。

ポーズではない。

いささか胸襟を開きすぎたかと自省した結果、唐突に現れ出た表情だった。

「いや、密約どおりにアナトリアを援助してもらえるのならば文句はない」

繕うようにそう答えると、エミールはやにわに立ち上がった。執務席の大きなデスクの引き出しから一本の酒瓶を取り出す。

今の世となつてからは貴重品と言える年代物のスコッチ・ウイスキーであった。

内容物の残量は、およそ半分といったところか。

それまでその存在を壁のオブジェか何かのように考えていたス

ミカから、軽い驚愕が言葉となつて放たれた。

「お酒を召されるとは初めて知りました」

「こんな役目は飲まないとやっていられない場面にも遭遇するのだよ。君も付き合いたまえ。議員どもと会食するまで、まだいささかの時間がある」

エミールは棚から取り出したふたつのグラスに琥珀色の液体を注ぐと、片方をスミカに向けて差し出した。

「執務中ですが？」

「構わんさ」

スミカの反応を確認することもなく、エミールはグラスの液体を一気に喉へ流し込んだ。

傭兵（４）

午後六時。

勤務先であるアナトリア研究所から帰宅したフィオナが自宅の玄関をくぐるとすぐに、香ばしく食欲をそそる刺激が鼻孔を突いた。耳を澄ますまでもなく、台所の方からは油の上で何かが弾ける軽快な音が響いてくる。

要するに、彼女の相方はただいま調理の真つ最中という訳だ。もう。きちんと交代でやりましようって、いつも言っているのに。

少しだけの不満を軽く尖らせた口先で表現すると、フィオナは自身の帰宅を短く告げる。

「ただいま」

「おう」

返事とも相槌ともつかない言葉が、奥の方から発せられた。

そこでは、似合わない前掛けを身につけたヴァルターが、見てくれとは対称的に慣れた手付きでフライパンを火に掛けている。予想どおり。

ある意味でそれは、極めて日常的な光景であった。

「あと数分待ってくれ。それで準備は完了する」

ぶっきらぼうが服を着たといった趣の態度をみせて、彼は振り向きもしないでフィオナに告げた。

炊事に関する彼女との約定は最初から頭の中にない様子だ。

当たり前のごとくそう言われて、フィオナは小さく肩をすくめる。

ほとんどあきらめの境地であった。

「ジェットストリーム・ヴァルター」がイエルネフェルト家の食卓を預かる身になったのは、いまだイエルネフェルト教授が存命中の頃であった。

そこに深い理由があった訳ではない。

ただ当時の状況では、研究所に籠もることの多かった教授や学問に忙しかったフィオナよりも、居候である彼の方が時間的余裕を持っていたから、というのが理由と言えば理由となるうか。

ただし、それには“建前上の”という枕詞が掲載される。

本当の理由は、もっと別のところに存在した。より具体的かつ根本的な理由が。

ヴァルターがそれを口にしなかったのは、ある個人の名誉が関わる問題だからであった。

もっとも、彼の調理師としての腕前に大きな問題は発生しなかった。

教授の方はともかく、男手ひとつで育てられたフィオナよりもはるかに多くの自炊経験を持ったヴァルターの方が、むしろ味覚を満足させる作品をこしらえることが多かったからだ。

普段のヴァルターを知る者たちには意外とも思えるだろうが、その料理のバリエーションは実に豊富だ。

少なくとも、それだけを見て彼が無粋な元軍人だと想像出来る人間は決して多くはなかっただろう。

一応、本来の取り決めでは彼とフィオナとが一日ごと、交互に炊事を取り仕切ることはなっていた。

男女平等などをうたう訳ではなかったが、家事全般に関する労力は出来る限り平等なものにしようとの考えが、彼らの間にそんな決まり事を成立させていた。

当初からフィオナは、そのことに対し極めて積極的であった。今ヴァルターが身に付けているヒヨコがプリントされた可愛らしい桃色の前掛けも、彼女が自分用にとわざわざ新調してきたものだ。

なんでもどこその有名デザイナーの手によるブランド品らしい。購入初日、嬉しそうにそれを着用したフィオナが「似合うかしら？」と彼の私室にまで見せにきた光景を、ヴァルターは鮮明に記

憶している。

そのヴァルターがせっかくの取り決めに反故にし始めたのは、彼が初めてフィオナの手料理というものを口にした次の日からであった。

要するに、初っ端から、ということだ。

それは、ヴァルターがアナトリアにやってきてすぐのことだった。

教授は緊急の会議とやらで出掛けてしまい不在。

そして、おそらくはほんの気紛れから、この日はフィオナが夕食の準備を志願して行った。

それまでは住み込みの家政婦がイエルネフェルト家の家事全般を司っていた。

家事全般においてなかなか優秀な中年女性だったのだが、たまたまその日を境に家庭の事情から本職を辞することになっていた。余りにも突発的な申し出であった。

しかし、状況の変化に戸惑ってばかりもいられない。

ゆえに、教授の提案で話し合いの場が持たれ、あえて後任を雇用するくらいならこれから自分たちで家中の事柄は片付けようとの決定が急遽なされた。

それは、その日の午後のことであった。

この日のフィオナはよほど張り切っていたと見える。

ひとりの女性として、ヴァルターにいいところを見せようと目論んでいたのかもしれない。

なにせ、彼女にとってはある意味での“初陣”だ。

意気込むと言う方が俄然無理な相談であろう。

フィオナはどこからか持ってきた分厚い調理レシピとにらめっこしつつ、自ら買ってきた山のような食材をひとつひとつ細々と計量しながら、目的の料理を制作しようと悪戦苦闘した。

包丁の使い方も、見ている側がはらはらするほど危なっかしいレシピとは料理の“設計図”ではなくあくまでも参考資料なの

だということが、どうも理解出来ない様子であった。

やがて、台所一帯はあたかも戦場跡のごとき惨状を晒すことと
あいなつた。

それも、明らかな負け戦の。

この世で最も悲惨な情景は負け戦の跡だ、と古の賢者は述べて
いる。

それを目の当たりにした時、さすがの「ジェットストリーム・
ヴァルター」もわずかに鼻白んだ。

表情こそ変えていないものの、見えない部分ではぐつしよりと
冷や汗をかいていたことであろう。

戦場におもむくのは別種の、それは完璧な緊張感であった。

戦慄と言い換えても問題はなかったはずだ。

しかしそれでも彼は、食卓に並べられたなんとも形容のしがた
い“製品”の数々を欠片も残らず平らげた。無言で。

そして最後に、「美味しかった？」と笑顔で尋ねたフィオナに
対し、「……まあまあだ」と短く答えたのだそうだ。

その言葉の奥にいかなる意味が込められていたものか、今とな
っては余人の知るところではない。

ただはつきりとしているのは、今のヴァルターが自らの役割を
フィオナと分担しようなどとは微塵も思っていないという明確な現
実だけであった。

それは、フィオナにとって随分と不本意な結果なのかもしれな
い。

ただし、平常勤務が明ける時間帯的にはヴァルターの側に比較
的余裕があるため、日常生活としては今の流れの方が随分と理に叶
っているのも事実であった。

ヴァルターの目論みどおり、食事の用意はそれから数分の後に
完了した。

本職も舌を巻く手際のよさでテーブルの上に複数の皿が並べら
れていく。

そのテーブルを挟み、フィオナとヴァルターは向かい合って席に着いた。

それは、いつの間にか成立していたお互いの positioning であった。幸いというか、「国家解体戦争」による大きな爪痕はアナトリアを含むここ小アジア半島付近にはおよんでいなかった。

主要な軍事施設の集中する北米地域や欧州、そして極東の一部とは異なり、「企業連合体」からの攻撃目標となる存在が少なかったことがその理由であろう。

彼らが可能な限り民生用インフラ施設の破壊を避けたことも、その一因と言えるかもしれない。

そのためか、アナトリアでは一般家庭の食卓に地域によっては高級品とされる自然食品の類が豊富に登ることも多かった。

今宵の料理も地産の川鱒トラウトを使用したムニエルと香草をふんだんに投入した新鮮なサラダ、それとバターライスがメインだ。

化学的に栄養素を凝縮した人口食材や遺伝子的に手を加えられたキメラ野菜などはそこにはまったく見られない。

ある意味、アウトドア料理のレシピに近い内容だと言ってもいいくらいだ。

フィオナは両手を胸の前で小さく組み短く神への祈りを唱えると、「美味しい」を連発しながら料理を次々と口に運んだ。

淑女レディという印象はそこにはない。

しつけにうるさい古風な人間であれば、子供のごとき彼女の態度を目にするやいなや、「はしたない」と強く叱責するに違いなかった。

しかし、ヴァルターの目にはそれがとても健康的でかつ愛らしく映った。

その視点は恋人を見る目と言うよりは愛娘を見る目と評した方が随分と近い。

彼自身もそれを否定することはないだろう。

半分程度は自覚もしているようだ。

ふたりの間にはひと回り以上の年齢差が存在するのだから、それもまあやむをえない心情なのかもしれない。

「ねえ、ヴァルター」

食事がひと段落した頃、ヴァルターがいった食後の珈琲を前にして唐突にフィオナが口を開いた。

わずかに深刻そうな表情を形作る。

彼女は問うた。

「エミールの依頼、受けるつもりなの？」

「まあな」

湯気のがる熱い珈琲カップを右手に、ヴァルターは淡々と答えた。

「アナトリアには借りがある。俸給分の働きをしているだけじゃ、そいつを返済出来そうにないからな」

それを聞いてフィオナは、はつきりと表情を曇らせた。

彼女の父親が生前口にしていた台詞を思い出したからだった。
フレイズ

「AMSの根幹にあるのは悪魔的な思想だよ」

イエルネフェルト教授は、時には諭すように、そして時には愚痴るように同じ内容のことを語っていた。

「本来、機械というものは人間に奉仕するという目的をもって存在している。しかし、AMSは人間が機械に奉仕することを要求する。そんな莫迦なことがあるか」

幾度となくそれを聞かされたフィオナも、まず同様の考えを抱いている。

確かに、AMSは機械が全力を発揮するために人間が犠牲となることまでを求める。

詳細な研究結果は「ビッグ・シックス」を初めとする「企業連合体」から今もって発表されていないが、ネクスト技術の初期被検体となったリンクスの多くがすでにその命を失っているとも聞く。

ましてやエミールの言ったことが事実であれば、ヴァルターが持つAMS適性は極めて低いもののはず。

なれば、彼がネクストを動かす際に受ける精神負荷たるや一体どれほどのものとなるのだろう。

A M Sの被験者として一切の経験を持たないフィオナには、欠片も想像することの叶わない事柄だった。

フィオナは、出来うるならヴァルターがリンクスとなることを止めたかった。

目の前にいる大事な人を、少しでも危険に晒したくはなかったからだ。

近親者を持つ者として、しごく当たり前の心情と言える。

しかもエミールの計画によると、彼は「アナトリアの傭兵」として戦地に送り込まれるのだ。

それも、当の本人が何らかの利益をえるためでなく、コロニー・アナトリアの独立維持という極めて曖昧模糊な政治的目標のためにヴァルターはアナトリアから受けた借りを返すため、と言っていた。

しかし、フィオナはその言葉を素直に受け取ることが出来ずにいた。

確かに今の彼がアナトリアを新しい故郷と考えていることに疑いはないだろう。

でも同時に、自らの心身と生活とを犠牲にしても構わないとさえ思えるほどの郷愁をこの土地に抱いてくれているようにも見えなかった。

ひよつとしてわたしのため？

彼女の中で膨れあがった想像が、ふと明確な姿を形作った。
ヴァルター

この人は、わたしやお父さまが愛していた「この土地」^{アナトリア}を、ただそれゆえに守ろうとしてくれているのかもしれない。

彼がわたしを大切に想ってくれているのは間違いない。

そして、そのわたしが愛してやまない「故郷」だからこそ、この人はアナトリアの力になってくれようとしているのではないかしら。

もちろん、それが単なるわたしの思いあがり過ぎないことはわかってる。

でも、この人ならそう考えても不思議じゃないように思えてならない。

もしそうなら、わたしはこの人に何をしてあげればいいのだろう。

やはり、制止するべきなのだろうか。

「フィオナ」

葛藤する彼女を現実の世界へ呼び戻したのは、ヴァルターが掛けたひと言であつた。

「反対するのか？」

「え？」

「俺がネクストに乗ることだ。フィオナがやめると言うのなら、俺はこの件には今後一切関わらない」

ヴァルターは断言した。

「だがその場合、別の誰かがあの『ノートウング』とかいう機体に乗るだろう。俺は自分が出ることを、出来るとして名指しで求められたことを、他人に押し付けてまで自己の安泰を図ろうとは思わない。それだけはわかってくれ」

「その台詞」

彼の言葉を聞いたフィオナは、寂しげに苦笑してこう言った。

「まるで、『英雄』の言葉みたい」

ヒロイズム
英雄願望。

男性の多くは、そんな子供じみた感性を多量に保有していると聞いている。

その本質を形成するのは、積極的な自己犠牲の肯定だ。

それは、女性であるフィオナにとってまったく理解出来ないものだった。

他者を犠牲とするくらいなら、あえて自らがその役目を率先して負う。

それは、確かに人として美しい行動理念なのだろう。

しかしその外面の煌めきに陶醉した者たちは、後に残された人々が一体どのような想いを抱えさせられるのかまで考えをおよぼしてはいないのだろうか。

だとしたら、それは随分と無責任な話だと思う。

自分はやはり見知らぬ他人のそれよりも、身近な人間の人生が大事だ。

冷たいように聞こえるかもしれないが、包み隠さず本音を言えば誰だってその結論に辿り着くような気がする。

正直、あなたを危ない目に遭わせるくらいなら、他の誰かの身に何かが起こってもわたしは一向に構わない。

むしろ、その方が望ましく感じる。

おかしい？

そんなはずないわ。わたしは間違っていない。

わたしはあなたを大切に想っているのだから。

フィオナはそこまで思いを巡らせた後、急に我に返ると強烈な自己嫌悪に襲われた。

今しがた心中に浮かんだ激しい感情が、その本質において利己主義^{イスマ}そのものだと思いつたのである。

思考が混乱して、ふうと短い溜息が出る。

そんな彼女を見かねたように、ヴァルターが口を開いた。

「英雄なんかになりたいとは思わないな」

その口振りには、深刻そうな色合いは微塵も見られない。

ひと呼吸だけフィオナの反応を確認すると、彼は言葉を続けた。

「いい英雄は死んだ奴だけ。昔からそう言われているが、第一俺は死ぬためにフィオナの許可がいる。仮に俺が英雄とやらになりにたくても、お前がそれを許さないだろう？」

始めその言葉をきよんとして聞いていたフィオナであったが、それが彼一流の冗談であることに漸く気付き、次の瞬間には肩をすくめてくすりと笑い声をあげた。

「そうね。そういう約束したっけ」

彼女の様子にヴァルターがあきれる。

「おいおい。忘れていたなんて言うなよ」

「ごめんなさい」

上目づかいでヴァルターを見ながら、フィオナは謝罪の言葉を口にした。

「当たり前のこと過ぎて、本気で忘れていました」

ヴァルターが苦笑する。

そうだった。

彼女は思った。

ヴァルター・ノボトニーという人は、そもそもそういう人なのだった。

いわゆる、「義」の人。

自分の中の決まりごとに心底準じることが出来る男性。

頑固一徹で、ある意味「石頭」

きつとこれまで女性に好かれることなんて皆無だったんじゃないかと思う。

でも、わたしはそんな彼に惹かれたのだ。

そうでなければ、あの時彼にこの身を任せたりは決してしない。

そして、この人はわたしの信頼に応えてくれた。

もちろん、これからそうであるに違いない。

誰がなんと言おうとも、わたしはそれを信じている。

よし、だったらわたしはこの人が行く道を否定しないようにしよう。

そして、出来る限り彼を助けることしよう。

わたしが決めたことだもの。

わたしがそれを疑ってどうするの。

わたし自身を信じましょう。

この人を信じると決めたわたし自身を。

そう思いを巡らせたフィオナは、あたかも、何かを吹っ切った

ような明るい表情を見せた。

わざとらしい咳払いをひとつし、すつと背筋を伸ばしてヴァルターに向き直る。

彼女は言った。

「あなたがリンクスとなることを、わたしは認めます。その代わり、改めてひとつお願いがあるのだけれど、よろしい？」

即座にヴァルターは了承した。

「拒絶する理由はないな。言ってみろ」

「実は……」

彼の言葉に促されるようにフィオナは大きく口を開いた。

一瞬で覚悟を決め、息を飲んで目の前の男と対峙する。

しかし、発するべき言葉は主の期待を裏切って喉の奥から出てきてくれない。

あせりが羞恥を呼び、それがさらなる摩擦となつて彼女を縛る。膝の上で両手を握り、視線をあちこちに泳がせながらフィオナはつまつたそれをなんとか吐き出そうと努力した。

もう一度、意識して喉を鳴らす。

「……その、わたしたち」

傍目からも明らかなほど赤面し、漸くフィオナは目的を果たした。

「ああいう関係になつて随分と経つでしょう。だから、その、そろそろどうかな、なんて思ふのだけど」

それは、遠回しな「婚姻プロポーズの申し込み」だった。

少なくとも、ヴァルターにはそうとしか聞こえなかった。

なるほど、それならば発言に努力が必要なのもうなづける。

ましてや女性からの申し出だ。

その勇気たるや、男性側から言い出す場合と比較して数倍を消費することとなるのだらう。

しかし、まるで小娘のようなありさまだな。

おどおどと挙動不審なフィオナを見やり、ヴァルターはそう感

じた。

フィオナ・イエルネフェルトという女性は、衆目には相当の才媛として知られていると聞いている。

なんと言つても、コロニー・アナトリアをここまで導いてきた故マルクス・イエルネフェルト教授の御息女だ。

いまだに彼女の存在を雲の上のごとくに感じる者がいたところで、ヴァルターは一向に驚かない。

だが、今自分の目の前でもじもじと所在なげにしているこの娘からは、そんな一般的な印象イメージから形成された「ミス・イエルネフェルト」の姿など欠片も見出せなかった。

どこにでもいる二二歳の普通の娘だ。

それが、ヴァルターにはおかしく、そして同時に嬉しく思えた。

フィオナ

この娘がこんなさまを見せるのは、俺の前でだけだ。

そして今の俺は、この娘にそうしてもらえることに快感を覚えている。

フィオナは俺という男に、文字どおり身も心も許してくれた。

だから俺は、それに対し誠実に応えなくてはならない。

そして今、彼女はあの応えを確かな形とすることを望んでいる。何をためらうことがあるう。

「教授の月命日、今月は休日だったな」

珍しく微笑んでみせながら、ヴァルターはフィオナに告げた。

「ちょうどいい。一緒に叱られにいくとするか。俺は大事に育てた箱入り娘を奪った極悪人として。お前はこんなろくでなしを伴侶に選んだ不孝の娘として」

その言葉を聞いて、フィオナは瞬く間にその表情を輝かせた。

感極まり、今にも泣き出しそうな顔のまま立ち上がった彼女は、潤んだ瞳で目の前の男を一途に見詰める。

「ありがとう……」

フィオナは言った。

「わたし、幸せです……」

言葉を飾ることに意味はない。

その短い言葉だけで、ヴァルターは彼女の赤心を十二分に理解した。

なんとも上手く乗せられたような気もするが、そんなことはどうでもよかった。

いかに向こうから求められたことが切欠とはいえ、幾度も己の腕に掻き抱いた愛しい“オンナ”だ。

このまま残りの人生を彼女の尻に敷かれたまま終えるのも、案外悪いものではないだろう。

むしろ、それは俺にとって望外の幸福なのかもしれない、とすら思える。

そして、そのまま求めるようにまぶたを閉じたフィオナの気持ちに応えるがごとくヴァルターも立ち上がり、ついにむような口付けを彼女に捧げた。

ヴァルターの携帯電話がけたたましく呼び出し音を鳴らしたのは、ちょうどその時だった。

エマージェンシー
緊急事態発生。

それはアナトリア警備部隊本部から発せられたもの——すなわち軍事的衝突の発生、またはその兆しを知らせる非常通信であった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1567z/>

ArmordCore4 レイヴン・オブ・アナトリア

2011年12月6日22時51分発行